

第3章 貝塚周辺微高地部の調査（轟貝塚第9～11次調査）

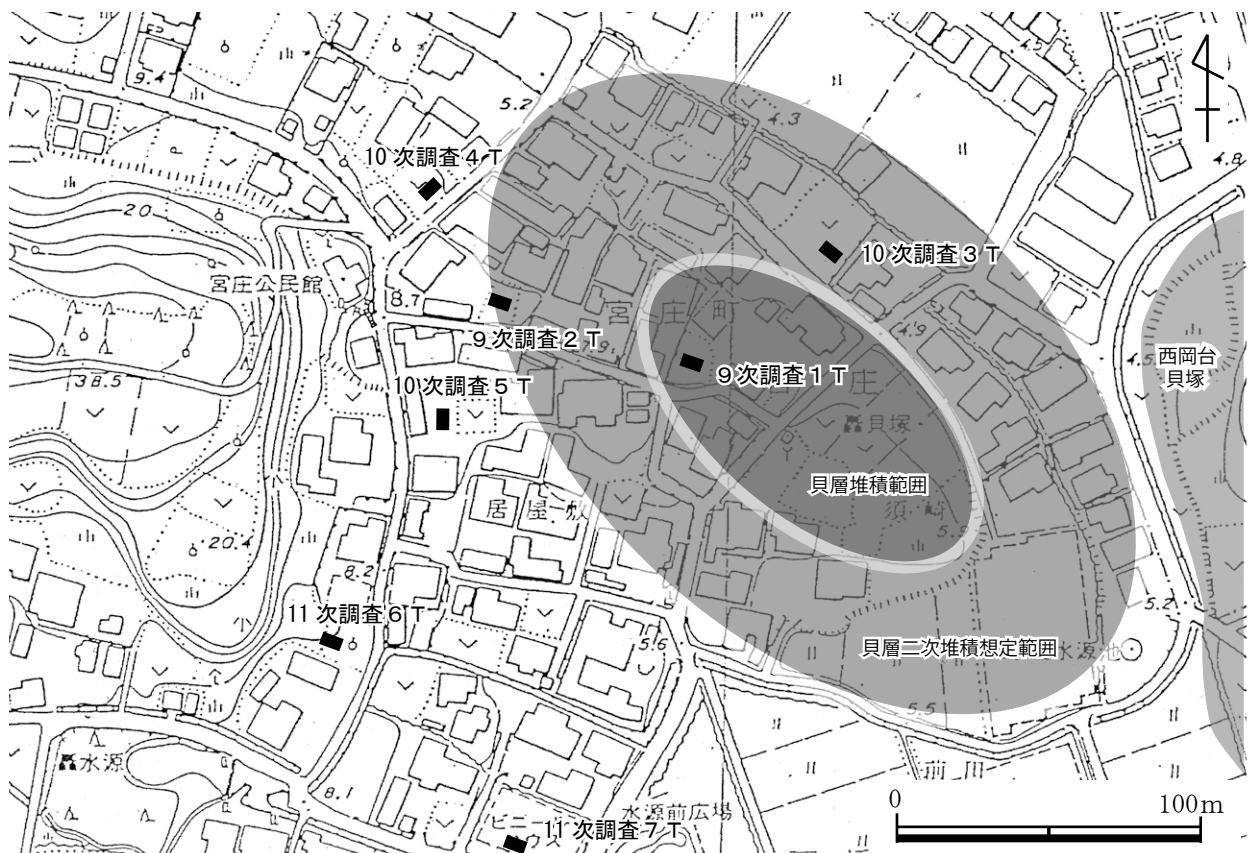
第1節 調査の概要

(1) 目的と方法

第2章で述べたとおり、轟貝塚においては古く大正期から発掘調査が行われてきた。しかし人骨の検出を主目的とした大正期の調査はもちろん、昭和期の調査でも、調査対象は狭義の貝塚部分から大きく出ることではなく、貝塚を含めた集落遺跡としてその全体像を明らかにできるだけの調査成果は無かった。平成16・17(2004・2005)年度に宇土市教育委員会が実施した第7・8次調査は、轟貝塚において初めてとも言える遺跡の範囲確認を主目的とした調査であり、調査の結果、貝層の堆積範囲が一次堆積・二次堆積に分けて推定された。ただし、ここで推定されたのは貝層そのものの分布範囲であり、貝塚を取り巻く生活域全体の解明という点では、多くの課題が残されていた。

こうした状況から、貝塚に伴う居住域など、集落遺跡として全体の範囲確認を念頭に実施したのが平成23～25(2011～2013)年度の第9～11次調査である。舌状台地の先端に位置する貝塚に対し、北西部のやや標高が高い一帯を調査対象としたが、そこは家屋が立ち並ぶ住宅地であり、広く面的な発掘調査を行うのは困難であった。よって、個人住宅の庭や畑を利用し、幅2m・長さ5m程度を基本とするトレンチ調査を行うこととした。

3か年で計7か所の調査を実施し、調査区はそれぞれ第1トレンチ(1T)～第7トレンチ(7T)とした(第20図)。調査次数は年度ごとに数えることとし、平成23年度を轟貝塚第9次調査(1T・2T)、24年度を



第20図 第9～11次調査位置図 (S=1/2,500)

第10次調査（3 T～5 T）、25年度を第11次調査（6 T・7 T）とした。

（2）経過（調査日誌抄）

轟貝塚第9次調査

平成23（2011）年

- 11月24日 第1トレンチ（1 T）調査開始。当初から各層よりハイガイ・ハマグリ・カキなどを含む貝殻片と共に縄文土器片（後期か）多数出土。
- 11月28日 5層上面検出遺構の掘削。ともに貝殻を多量含むSK01・SK02のうち、SK02からは近世陶器出土。SK01からは縄文後期とみられる土器片と共に獣骨出土。
- 11月30日 地山上面遺構検出及び遺構の掘削。
- 12月5日 1 T完掘，写真撮影。第2トレンチ（2 T）調査開始。
- 12月6日 2 T 4層上面遺構検出，遺構掘削。
- 12月9日 6層上面遺構検出，遺構掘削。
- 12月15日 SK01より，埋葬骨とみられる獣骨（牛又は馬？）検出。同時に滑石製石鍋片が出土したことにより，遺構の時期は中世以降とみられる。
- 12月20日 6層の掘り下げに伴い弥生土器多数出土。
- 12月27日 2 T完掘，写真撮影。

平成24（2012）年

- 1月5日 1 T埋め戻し。
- 1月18日 2 T埋め戻し。

轟貝塚第10次調査

平成24（2012）年

- 9月28日 第3トレンチ（3 T）調査開始。攪乱層掘り下げ。
- 10月2日 現代盛土以前の旧表土とみられる黒色土検出。
- 10月3日 調査区中央に多量の貝殻（アサリ）が溝状に密集して出土。貝層ではなく，排水用の暗渠とみられ，攪乱と判断される。
- 10月4日 調査区中央の攪乱暗渠を掘り抜くと水があふれるため，これを避けてトレンチ東壁付近のみサブトレンチを設けて掘り下げた。その結果，地表下約170 cmの深さで貝層を検出。
第4トレンチ（4 T）調査開始。表土掘り下げ。
- 10月5日 3 Tサブトレンチ内で貝層の掘り下げを試みるが，面積の狭さと湧水の多さにより断念。ピンポールを挿入して調べた限りでは，貝層は検出面から50 cm程度の厚みはありとみられる。これを以て3 Tの調査を終了。
- 10月10日 4 T 4層上面検出遺構の掘り下げ。
- 10月16日 5層上面検出遺構の掘り下げ。
- 10月24日 4 T SK01を掘削。北東隅で弥生土器を中心とした多くの土器片が出土。
- 11月6日 5・6層の掘り下げ（11月8日 地山検出）。
- 11月9日 完掘状況写真撮影。4 T調査終了。
- 11月12日 第5トレンチ（5 T）調査開始。周辺伐採，表土剥ぎ。
- 11月21日 現地表から50 cmあまりの深さで青灰色岩盤の地山を検出し，同時に複数の遺構を検出。

以後、遺構の調査（12月10日まで）。

12月3日 3 Tにて貝層を一部サンプリングし、埋め戻し作業を実施（4日まで）。

12月12日 4 T埋め戻し作業を実施（13日まで）。

12月17日 5 T埋め戻し作業を実施。調査終了。

轟貝塚第11次調査

平成25（2013）年

11月12日 第6トレンチ（6 T）調査開始。周辺伐採、表土剥ぎを実施。

11月14日 攪乱除去、遺構検出。

11月15日 遺構の調査。遺物はごく少ないが、土師器片など微量出土。遺構はほぼ中世～近世の所産とみられる。

11月21日 6 T完掘。写真撮影。

11月22日 第7トレンチ（7 T）調査開始。

11月25日 雨により周辺の地下水位が上がったためか、調査区内に湧水が始まる。以後、ポンプにより排水しながらの作業となる。

11月27日 青灰色岩盤（地山）を検出。岩盤には複雑な形状の落ち込みがあり、落ち込み部分には須恵器・土師器など遺物を多数含む砂礫が堆積。以後、遺物を取り上げつつ岩盤以外の部分を掘り下げ（12月4日まで）。

12月5日 平面・土層断面の実測、写真撮影。7 T調査終了。

12月11日 6 T埋め戻し（12日まで）。

12月19日 宇土市重要遺跡保存活用検討委員会の渡邊一徳委員による調査指導（主に7 T岩盤層の岩石・成因について）。

12月20日 7 T埋め戻し作業を実施。調査終了。

第2節 調査の成果

以下、トレンチ別に調査成果を述べる。なお、文章中に示す出土遺物の分類については、第4章第4節に掲載した分類に準拠する。

（1）9次調査第1トレンチ（9次1 T）

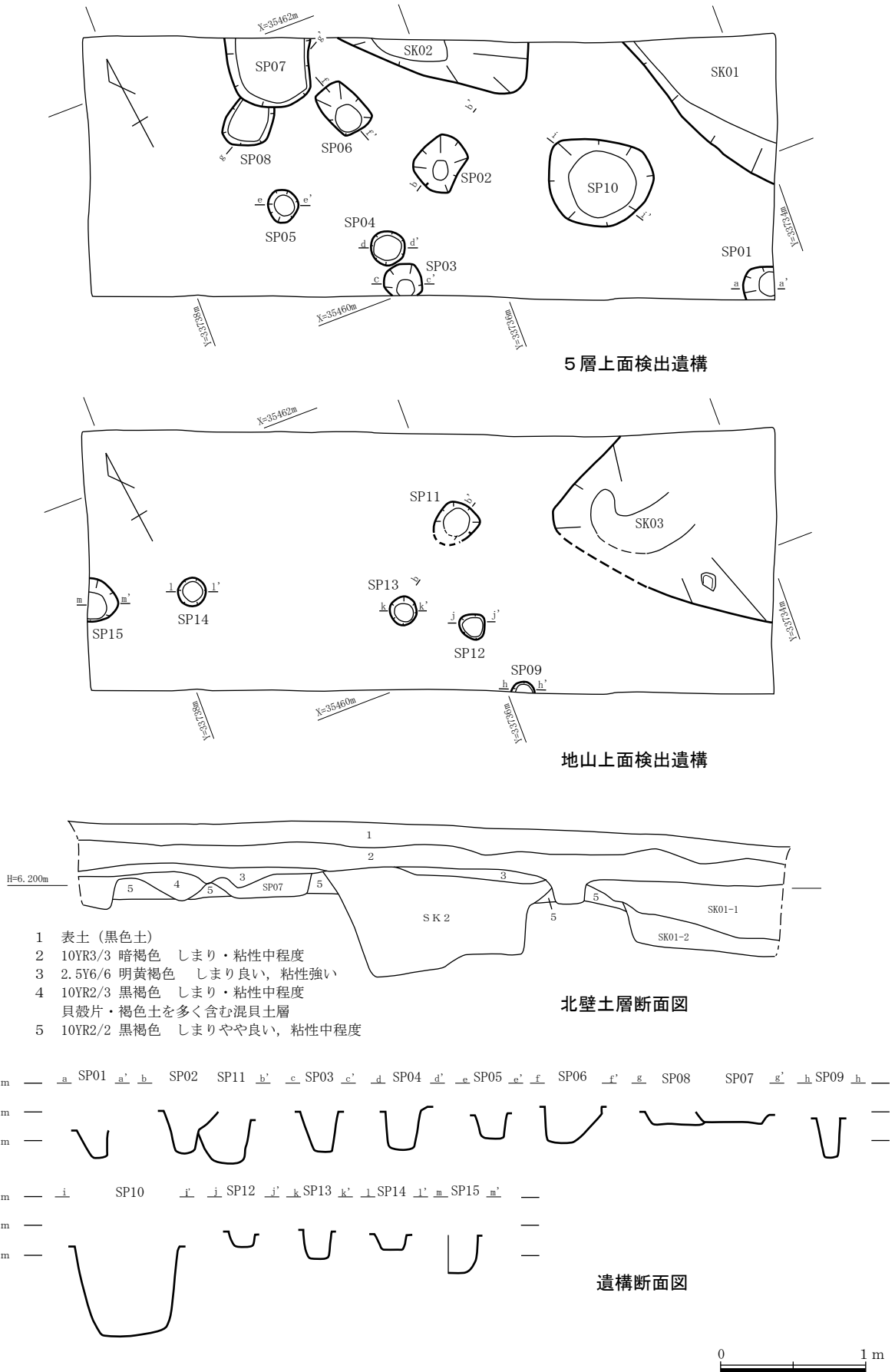
調査概要

過去に多くの発掘調査が行われた貝塚中心部の畑地から北西方向に約50 mの位置に設定した。そこは昭和41（1966）年の第6次調査において縄文時代後期の貝層や埋葬人骨が検出されたEトレンチに近く、また平成16・17（2004・2005）年度の範囲確認調査（第7・8次調査）の成果として推定した貝塚想定範囲の北西側端部でもある。現状は個人住宅の敷地の一画であり、特に耕作等は行わず庭として利用されている。西側隣接地との間は比高差約1 mの段差となっている。

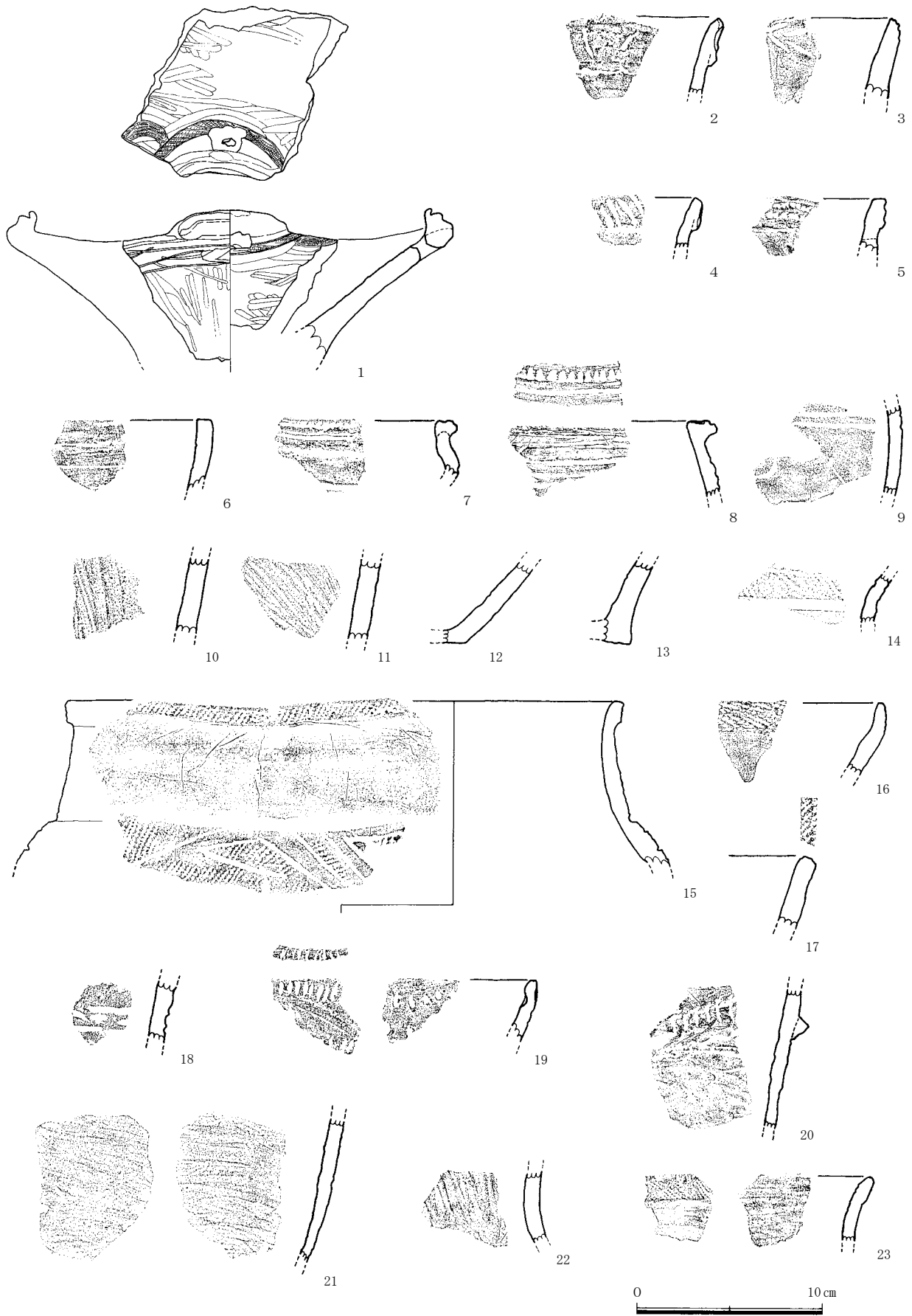
調査の結果、現地表から深さ約40 cmで地山を検出した。土層は1～5層に分けられ、1層は表土、2層はややしまりのある暗褐色土、3層は堅く締まった粘質土で、人為的に突き固められた三和土（たたき）の類とみられる。4層は砕けた貝殻が混じる混貝土層で、5層はしまりの良い黒褐色土である。このうち、1～3層は近～現代の攪乱層とみられ、4層が縄文時代後期をはじめとした遺物を少量含む遺物包含層、5層からは遺物の出土はみられなかった。

遺構は全体で土坑3基（SK01～03）と小穴15基（SP01～15）が検出された。検出面は5層上面と地山上面

第2節 調査の結果



第21図 9次調査第1トレンチ遺構実測図・土層断面図 (S=1/40)



第22図 9次調査第1トレンチ出土土器 (1/3)

に分かれ、前者はSK01・02及びSP01～08、後者はSK03及びSP09～15がそれにあたる。ただし、地山上面で検出したSP10は共伴遺物の新しさから、本来5層上面で検出すべきものを見落とした可能性がある。SK01は下層が黒褐色土で、上層は多量の貝殻を含む混土層である。部分的な検出であるため遺構全体の形状・規模は不明だが、土坑内に多量の貝殻を廃棄した廃棄土坑の可能性が考えられる。SK02にも砕けた貝殻が多量含まれるが、陶器の小片が出土したことにより、貝塚とは無関係な近世以降の遺構と判断した。SK03はごく緩やかに落ち込む不定形の土坑で、人為的でない自然の落ち込みである可能性もある。しかし、わずかながら地山の土がブロック状に含まれる点と、覆土中から打製石斧の破片が出土した点を考慮し、遺構として扱った。

その他、小穴群については、調査面積が狭いこともあって配置の規則性等は見出せない。しかし縄文時代遺物を出土するものも一部含まれることから、住居址をはじめとした遺構の一部である可能性は否定できない。

出土遺物（第22・39図）

1は攪乱層出土の浅鉢形土器である。器面は縦・横方向に磨きが施され、口縁部外面には横方向の細い沈線文、口縁部内面には2本の弧状沈線で区画された中に磨消縄文がみられる。また、口縁下部には穿孔がみられる。Ⅵ類に分類される。

2～13は4層出土である。2・4はⅤb1類で、粘土貼り付けにより肥厚させた口縁部に縦方向の沈線（短直線文）を施す。3は口縁部に斜め方向の細い沈線で施文するⅣc類である。5は肥厚させた口縁部に横方向の押し文を施すⅤ類に近いとみられるが、不明である。6は明確な特徴に欠けるが、厚手の口縁で先端をやや強くなでる。7～9はⅦ類とみられる。7・8は突帯状に口縁部を肥厚させ、口唇部に連続する刺突を施す。口縁下部には横方向の沈線文が施される。10・11は縦・斜め方向の貝殻条痕のみ確認できるもので、広くⅢ類に分類される。12・13は平底の底部片で、少なくとも12には立ち上がり部に薄く貝殻条痕がみられるためⅢ類とみられる。

14～17・23はⅥ類で、14は5層出土、15～17はSK01出土、23はSP15出土である。14・15は太めの沈線で区画された中に磨消縄文がみられるもので、15においては口縁部と肩部に施文がみられ、間の頸部はナデで仕上げられる。16・17・23は口縁部の小片で、16・23は口縁端部に、17は口唇部に磨消縄文がみられる。

18はSP02出土で、外面に凹線・凹点文を施すⅣc類とみられる。19は浅く広い凹線の間に連続する爪形文を施すⅣa類である。ただしⅣa類で特徴的な、胎土への滑石混入はみられない。20は粘土紐貼り付けによる隆起帯文と、その上部への連続する刻目がみられる。後期とみられるが、詳細は不明である。21はⅦ類とみられる。

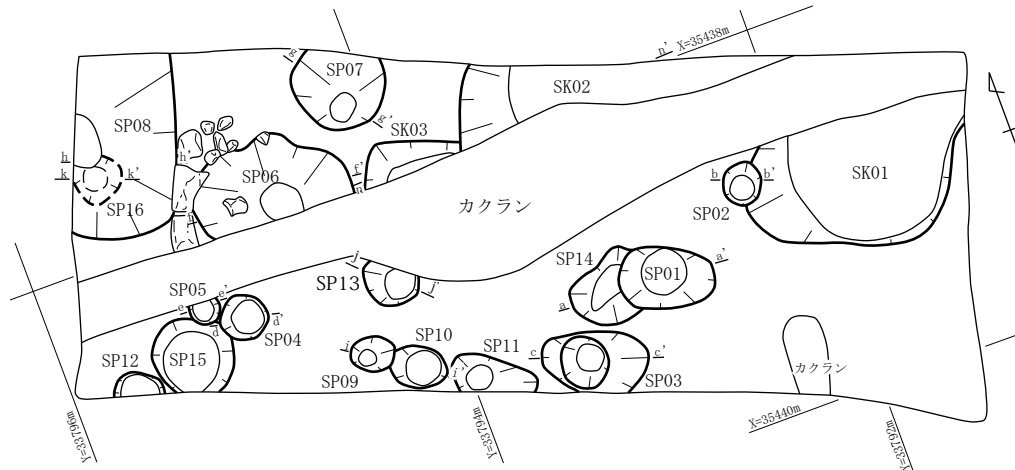
194はSK03から出土した安山岩製の打製石斧である。刃部の幅が広く全体が台形を呈し、断面は扁平である。第4章に示す磨製石斧の分類を援用すれば、Ⅱa類に相当する。出土した他の石器類に比べ大型品である。

（2）9次調査第2トレンチ（9次2T）

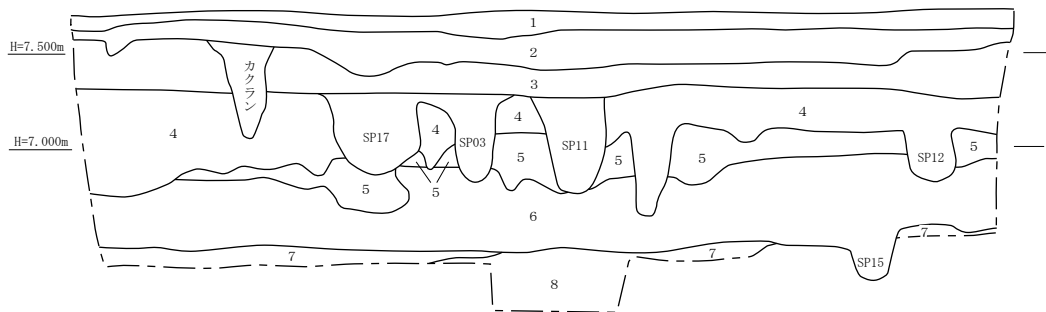
調査概要

第1トレンチから北西方向に60mあまり離れた畑の中に設定した。これより西側では地表面に貝殻の散布はほとんどみられず、第7・8次調査で推定した貝塚想定範囲で言えば2次堆積範囲の縁辺部にあたる（第20図）。

調査の結果、現地表から約120cmの深さで地山を検出した。土層は6層に分層され、上部から1層は現代の耕作土、2層は粘性のやや強い暗褐色土、3層は黄褐色・橙色の粘土を含む暗褐色土で、何らかの土地造成に伴う客土とみられる。ここまでが攪乱層であり、以下4～6層が黒褐色～褐色を呈す遺物包含層である。

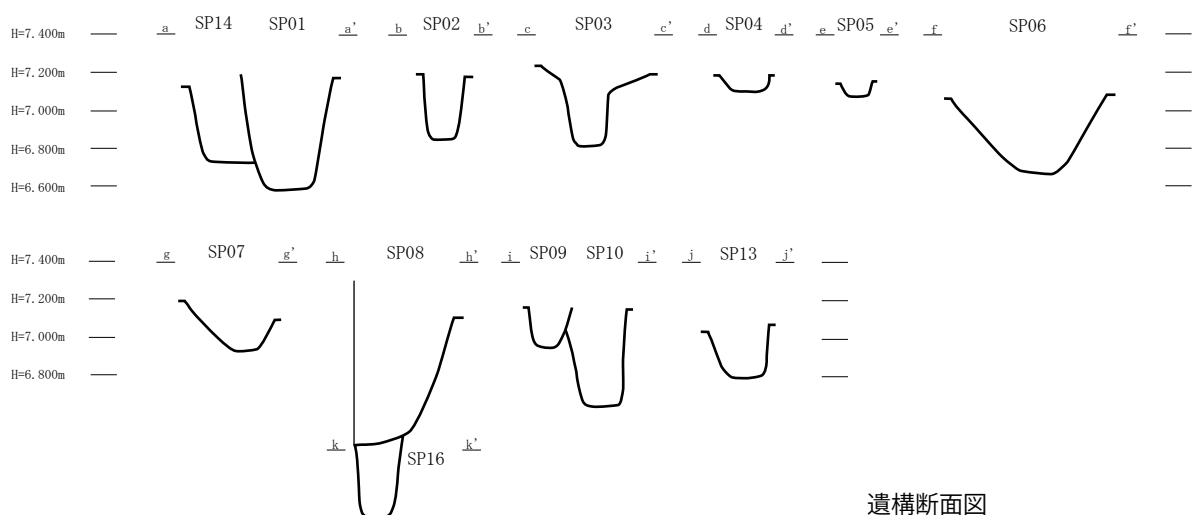


検出遺構平面図



- | | |
|---|--|
| 1 表土 黒色耕作土 | 5 7.5YR4/4 褐色 しまり・粘性中程度、やや砂質
弥生～中世の遺物を含む遺物包含層 |
| 2 10YR3/3 暗褐色 しまり中程度、粘性やや強い
炭粒・赤褐色粒（3層土か）少量含む | 6 10YR2/3 黒褐色 しまり・粘性中程度
弥生土器片を多量含む遺物包含層 |
| 3 10YR3/4 暗褐色 しまりやや強い、粘性中程度
黄褐色・橙色粘土を層状に含む現代造成土 | 7 7.5YR4/4 褐色 しまり中程度、粘性弱い、砂
遺物なし、自然堆積とみられる |
| 4 10YR3/2~3/3 黒褐色～暗褐色 しまり中程度、粘性やや強い
中世遺物を含む遺物包含層 | 8 5YR4/3 にぶい赤褐色 しまり・粘性強い 地山 |

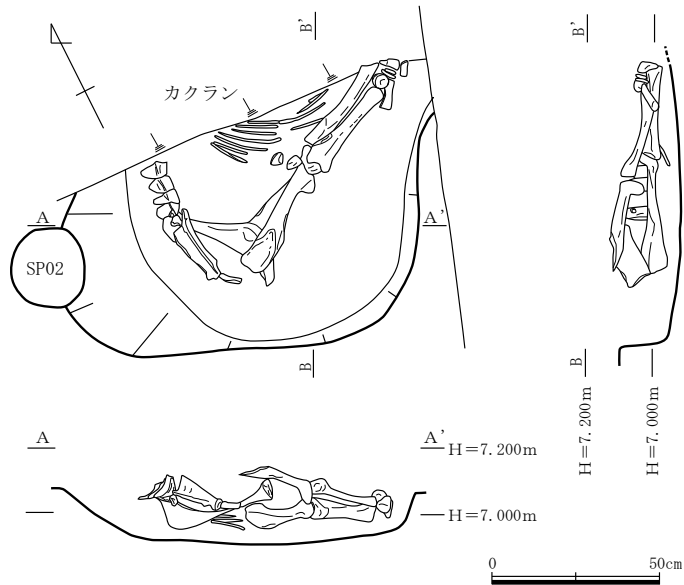
南壁土層断面図



遺構断面図



第23図 9次調査第2トレンチ遺構実測図・土層断面図 (S=1/40)



第24図 9次調査第2トレンチ SK01 獣骨検出状況 (S = 1/20)

出土遺物から4・5層は中世、6層は弥生時代の堆積と考えられる。6層の下で、褐色の砂質土である7層と赤褐色でしまりの強い8層を検出したが、ここから遺物の出土は無く、これらが地山であることを確認した。以上により、トレンチ内に縄文時代の遺物包含層は存在しないと言える。

遺構は土坑3基 (SK01～03) と小穴17基が検出された。ほとんどが5層・6層上面で検出された中世以降の遺構とみられるが、地山に掘り込まれ6層土を覆土とするSP15及び、SP08の底部から検出されたSP16のみ、弥生時代の遺構である可能性がある。調査面積が狭小であるため建物跡等の

復元はできず、各遺構の詳細な性格は不明だが、SK01のみ、出土した馬らしき獣骨の存在により、埋葬土壌であることがわかる。攪乱により土壌の半分は失われており、検出されたのは腰椎付近から後ろ脚にかけての部分だが、骨は埋葬時の原位置を保っている。土壌内から滑石製石鍋とみられる破片が出土したことから、中世の遺構と判断される。

出土遺物 (第25～27・39図)

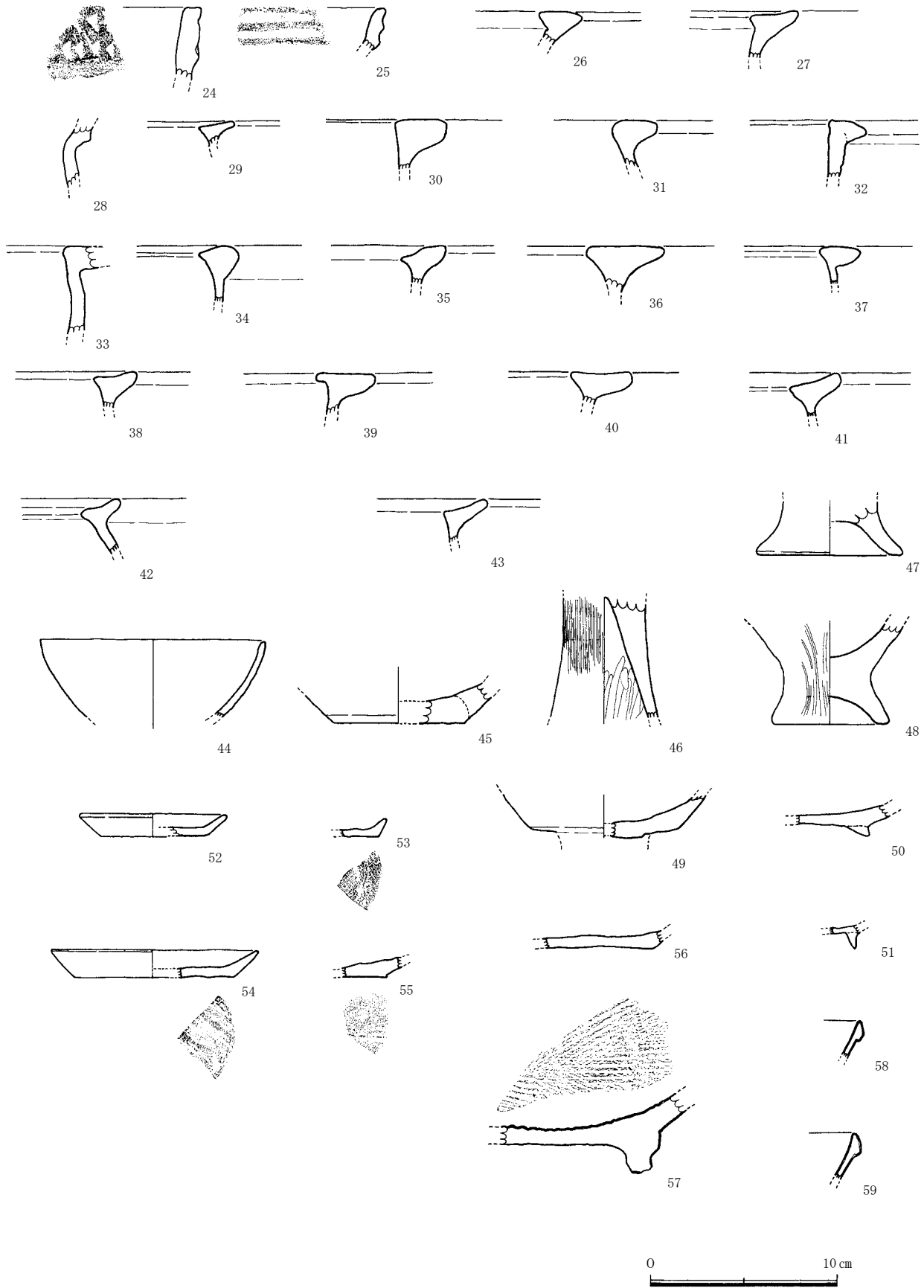
24・25はそれぞれ第4層第5層から出土した縄文土器である。24は口縁部に押引文に近い連続刺突を施し、その下部を横方向の凹線文で区画する。凹線文の様子から、詳細は不明ながらIV類に近いものと捉えられる。25は「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部片で、外面には横方向に平行する2本の沈線を施す。VII類とみられる。

26～43・45～49は弥生土器である。一部攪乱から出土したものを含むが、ほとんどが3～5層出土である。うち26・27は外反しつち立ち上がる壺の口縁部とみられ、口縁内側は突出する。28も同じく壺の頸部とみられ、二重口縁状の段がみられる。29～43は甕の口縁部である。第4章で述べる分類に従えば、32がI類、30・31・33がII a類、36・37・39がII b類、34・43がIV類、29・40・41がV類、35・38・42がVI類である。45は甕の底部、47・48は台付甕の脚部である。いずれも全体が丁寧なナデにより仕上げられ、48の外のみ、縦方向の刷毛目がみられる。46は高坏の脚部で、外面は赤色に塗られている。49も同じく高坏で、脚部を欠損する坏の底部にあたる。内外面ともナデで仕上げられている。

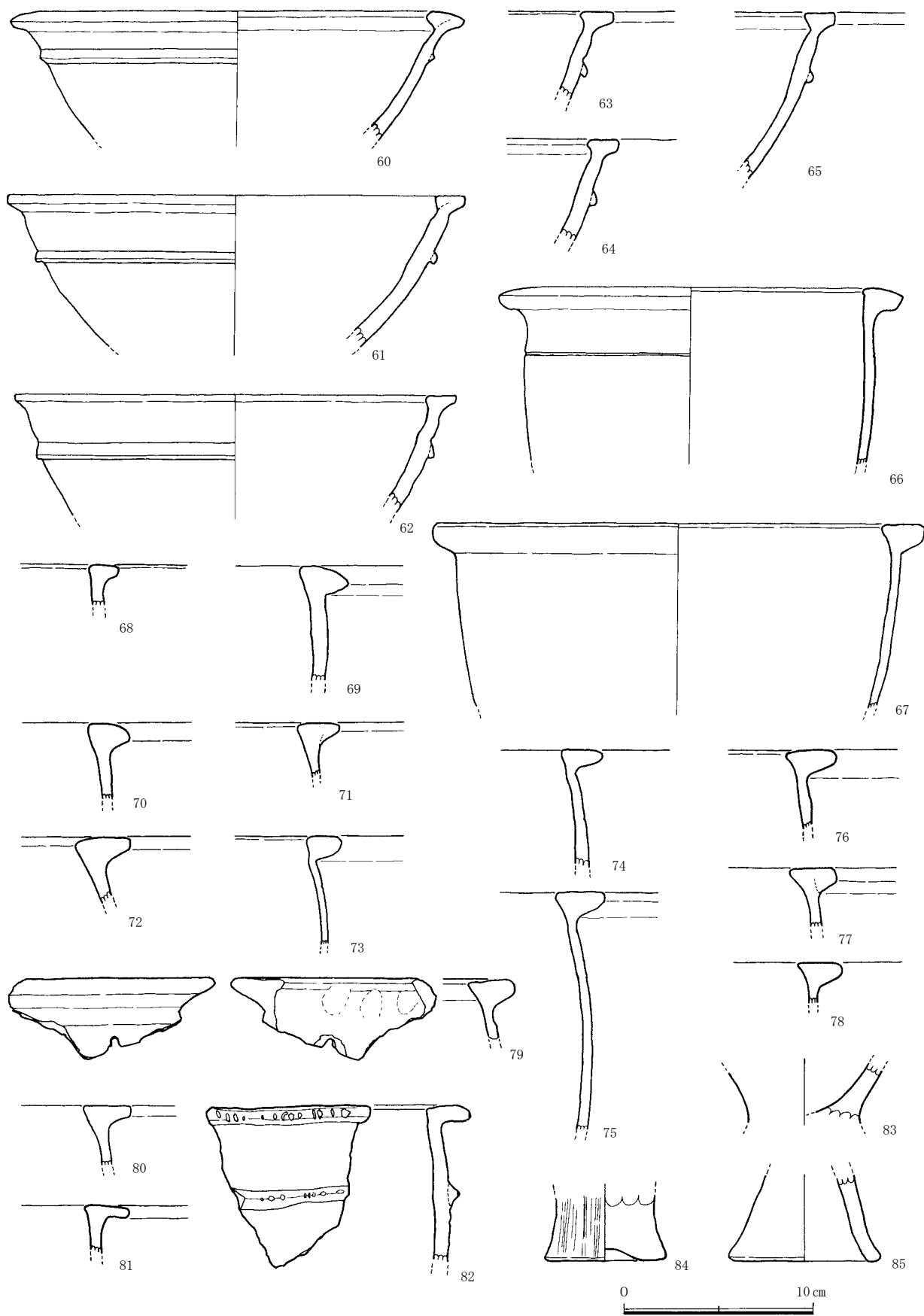
44は4層から出土した土師器の埴である。内外面ともナデで仕上げられ、器壁は薄い。50も同じく土師器の埴で、底部に高台を貼り付ける。内面は黒くいぶした上で磨きが施され、古代のいわゆる黒色土器(内黒土器)である。攪乱中より出土した。51は4層出土の須恵器埴の底部片で、小片のため詳細が不明だが、高台部分が残存する。52～56は3～5層出土の土師器の皿である。全体がナデで調整され、底部の切り離しは52～55は回転糸切り、56は回転ヘラ切りである。

57は3層出土の陶器の播鉢である。内面に条痕を施した後、高台の下部と外面底部を除く全体に釉がかかる。58・59は白磁碗の口縁部である。小片だが口縁部外面の玉縁が明瞭に残る。4層及び攪乱からそれぞれ出土している。

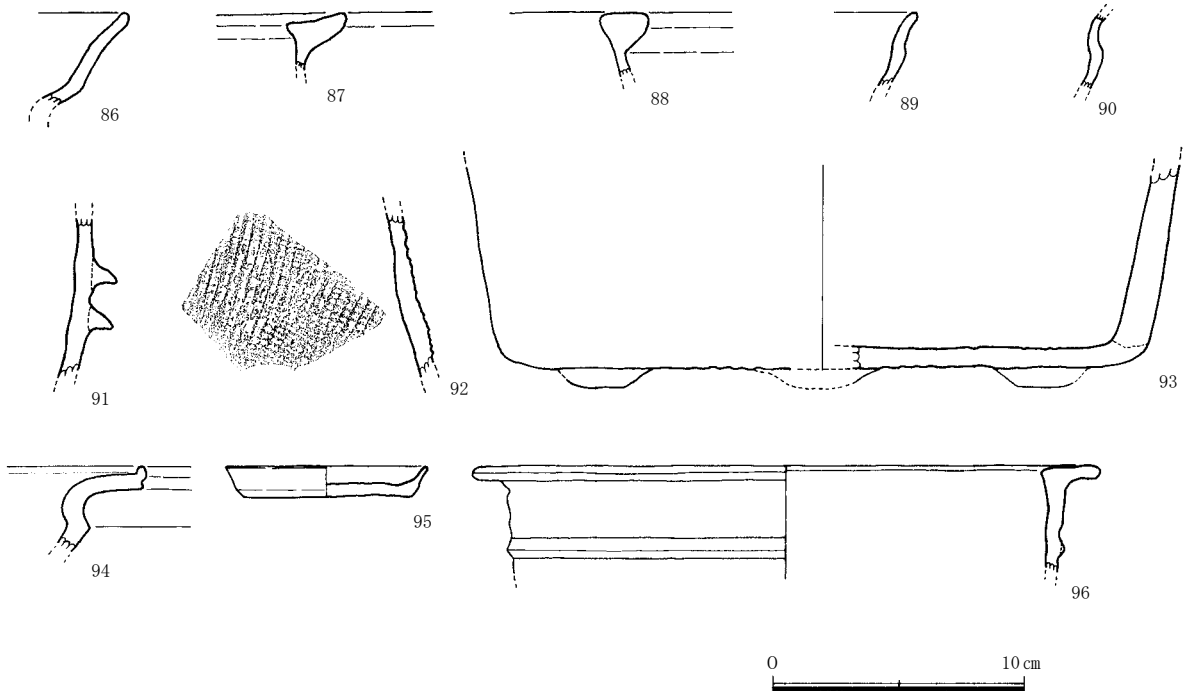
60～85は6層から出土した弥生土器である。60～65は外傾しながら立ち上がる口縁部で、鉢状の器形が想定される。口縁部は内外に突出し、外面は口縁下部に1条の突帯をめぐらす。口縁部を中心に薄く刷毛目



第25図 9次調査第2トレンチ 1～5層出土土器 (1/3)



第26図 9次調査第2トレンチ 6層出土土器1 (1/3)



第27図 9次調査第2トレンチ 遺構内出土土器 (1/3)

が残るものもあるが、基本的に最後はナデにより仕上げている。66～82は甕の口縁部で、66・68～75・80～82がⅡa類、67・76～79がⅡb類である。83～85は台付甕の底部～脚部である。粘土塊の一部を凹ませる事で脚部とする84に対し、85は甕本体と同様に輪積みにより成形している。

86～96は遺構内から出土した遺物である。86はSK01から出土した高杯の口縁部とみられ、中央に段を設けて外反して立ち上がる。87・88はSK02から、91はSP07から、96はSP15から出土した弥生土器の甕で、口縁部の形状から87はⅥ類、88はⅠ類、96はⅡa類に分類される。96には口縁下部に1条の突帯がめぐる。胴部片である91にも、高さのある2条の突帯がめぐる。89・90はそれぞれSP01・SP06から出土した土師器の坏で、89は器面をよく磨き、内面を黒くいぶした黒色土器（内黒土器）である。92は須恵器の甕片で、外面に格子目叩き痕が残る。ただし内面に当て具痕はみられない。93は4層及びSP08から出土した瓦質土器である。底部には円形の低い脚が付き、側面はやや外傾しながら急角度で立ち上がる。火鉢とみられる。94はSP13出土の甕の口縁部で、口縁付近で「く」の字形に折れ曲がり、さらに大きく湾曲しながら外反して立ち上がる。口縁端部は上方に屈曲し、外面に1条の沈線がめぐる。95はSP13出土の土師器皿で、底部に回転糸切離し痕が残る。

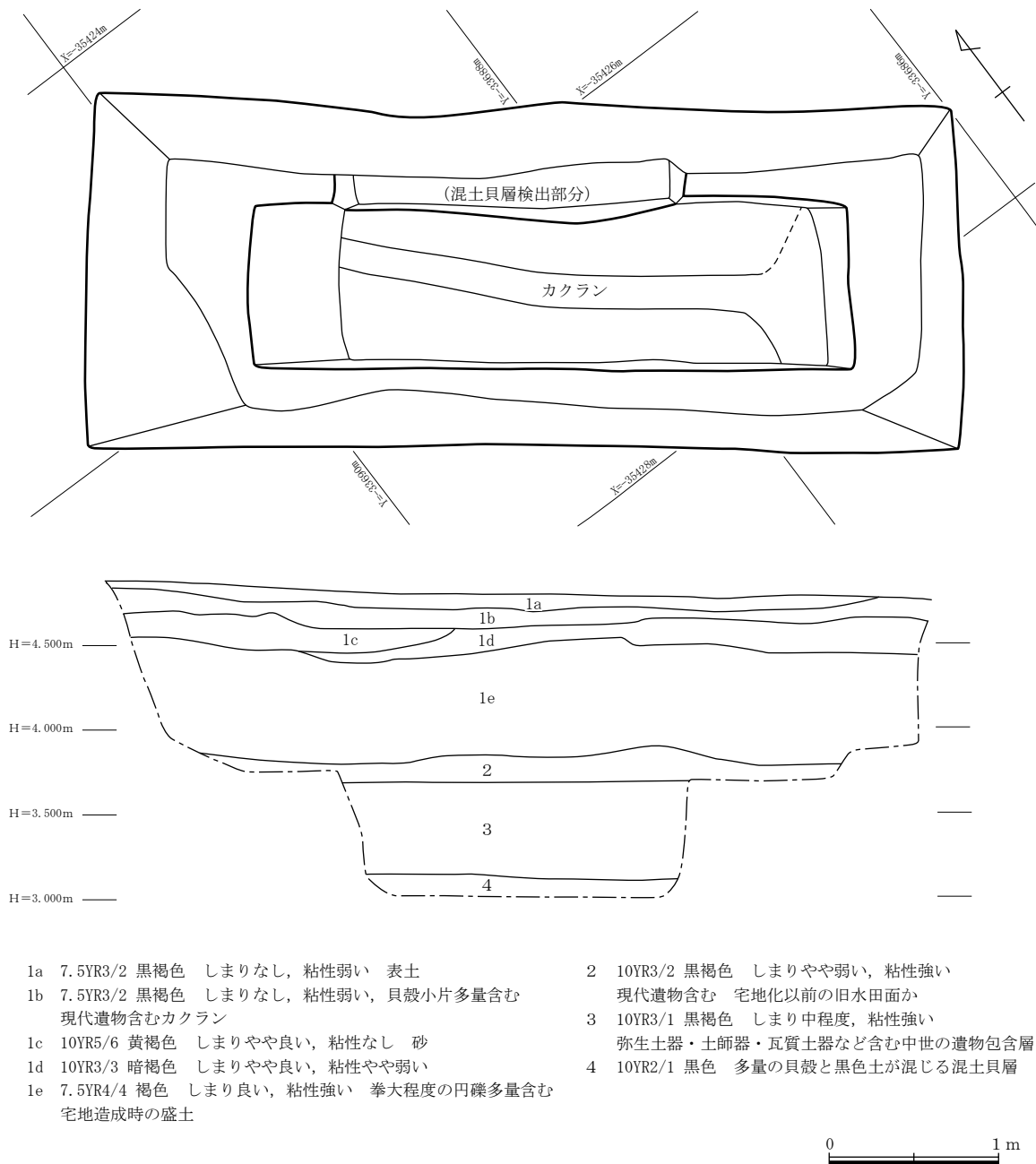
185は5層から出土した石匙である。縦長でつまみ部分が太く、Ⅱa類に分類される。189も5層から出土した小型の石皿である。扁平な安山岩で、敲打により中央が凹む。195は5層から出土した石製品である。安山岩製でよく研磨されている。磨製石斧の刃部片の可能性もある。197はSK01から出土した滑石製品で、石鍋の一部とみられる。内面はよく研磨され、外面には平面長方形・断面台形の突起を造り出す。

(3) 10次調査第3トレンチ (10次3T)

調査概要

貝塚中心部からほぼ真北に50mほど離れた地点に設定した。当該地点では過去に防火水槽設置に伴って多量の貝殻が出土しており、プライマリーな貝層が残存する可能性が考えられた。

調査の結果、現地表から深さ約1mまでは現代盛土とみられ(1a～1e層)、以下20cm程度が旧水田に伴



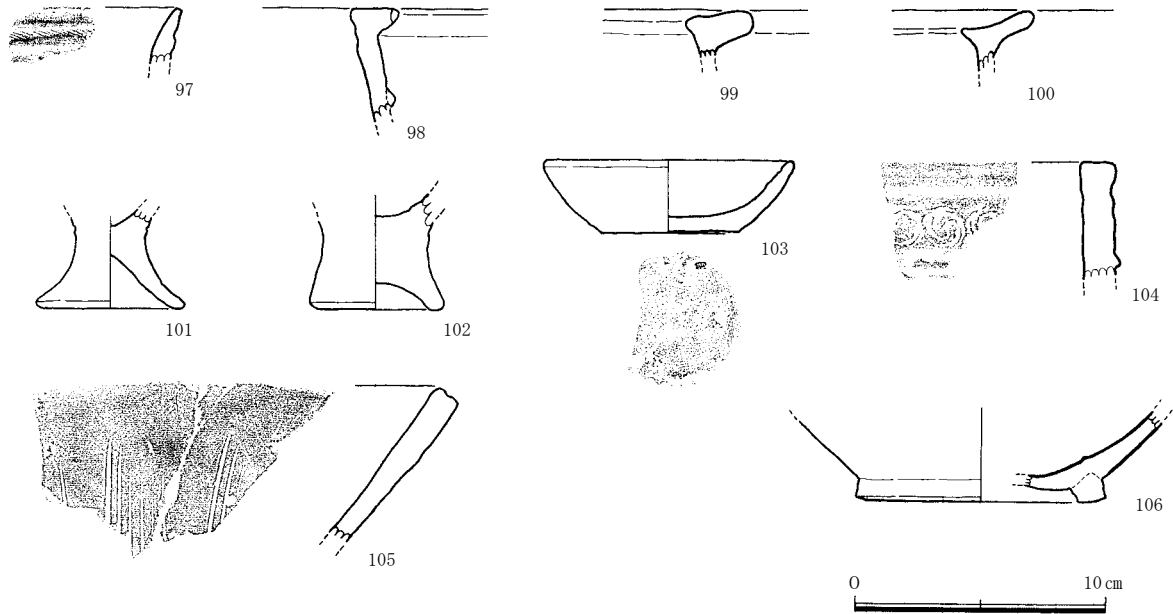
第28図 10次調査第3トレンチ平面図・北壁土層断面図 (S=1/40)

うとみられる黒色粘質土(2層)である。ここまでの攪乱層とみられ、以下に瓦質土器ほか中世の遺物を含む遺物包含層(3層)が厚さ約60cmにわたり堆積する。そのさらに下部で、多量の貝殻を含む黒色の混土貝層(4層)を検出した。現地表から混土貝層までの深さは約170cmで、貝層上面の標高はおよそ3.1mである。

ただし、トレンチ内中央が大きく攪乱されていることから、混土貝層を検出できたのはトレンチ北東側壁際のごく一部に留まる。そのため、貝層内については十分な調査ができず、層の厚さや広がり、含まれる遺物に基づく形成時期の推定などが今後の検討課題として残ることとなった。

出土遺物(第29図)

第3トレンチから出土した遺物として、97~106の10点を図示した。ただし、検出した貝層からの出土遺



第29図 10次調査第3トレンチ出土土器（1／3）

物は無く、攪乱層を含む1～3層出土の遺物のみである。

97は3層出土の縄文土器である。口縁下部に横方向の平行する沈線を2条めぐらし、沈線内には斜行する条線が残る。全体がよく磨かれており、Ⅶ類とみられる。98～100は1～2層から出土した弥生土器の甕の口縁部である。口縁の形状から、98はⅡa類、99はⅣ類、100はⅦ類に分類できる。101・102はそれぞれ1層・3層から出土した弥生土器の台付甕の脚部で、101は輪積みにより成形し、102は粘土塊の底部を凹ませることで脚としている。103は土師器の坏である。内外面とも磨滅が激しく調整が不明瞭だが、底部にわずかに回転糸切り痕がみられる。104は瓦質土器の火鉢で、口縁部が残存する。口縁下部には渦巻状のスタンプリ文がみられる。105は同じく瓦質土器の播鉢で、内外面ともナデにより調整した後、内面に縦方向の条線を施している。口唇部には1本の沈線がめぐる。106は1層から出土した白磁碗である。高台部分と外面底部を除く全面に釉がかけられ、口縁部は残存しないため玉縁などの有無は不明である。高台の幅は狭い。

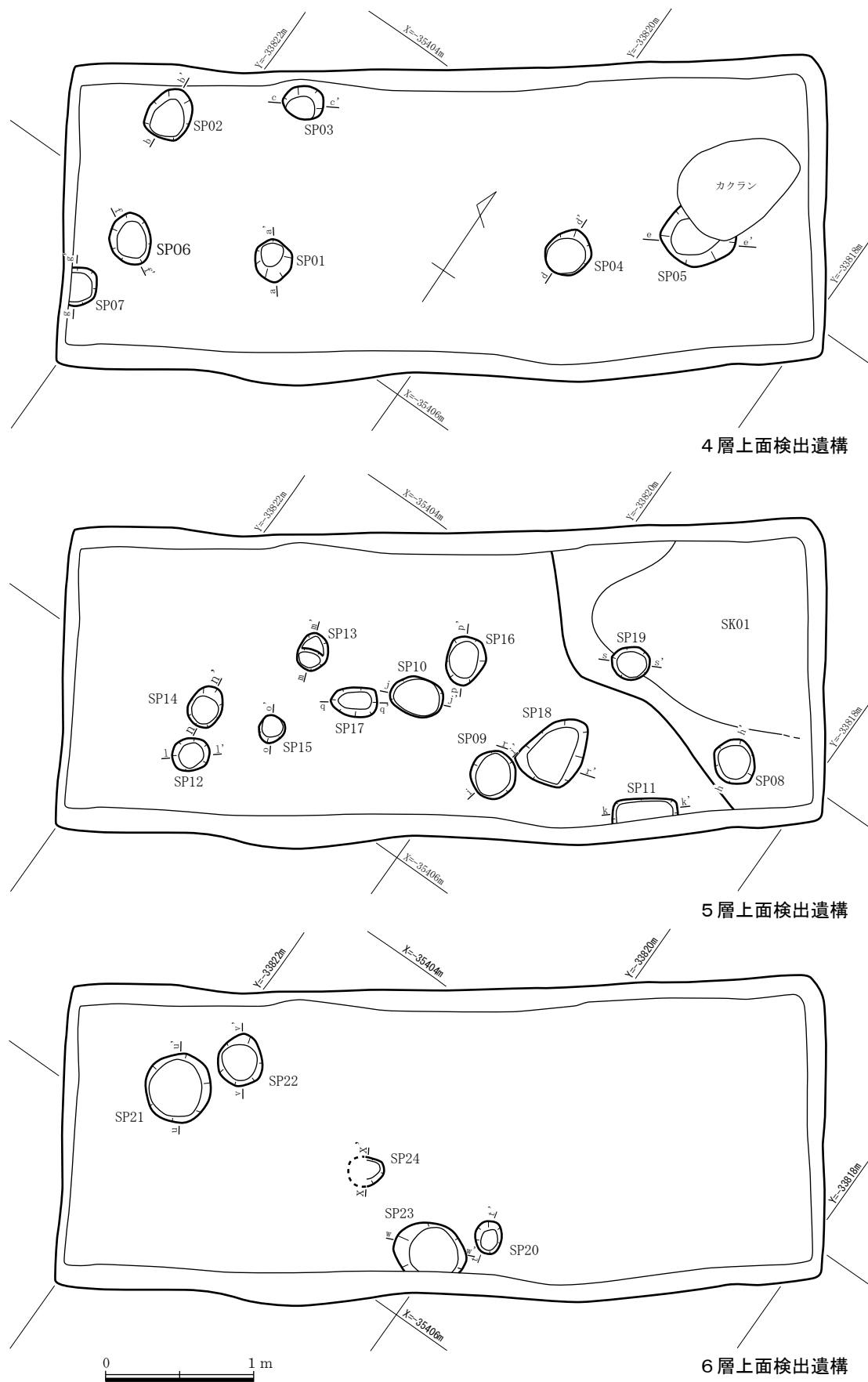
（4）10次調査第4トレンチ（10次4T）

調査概要

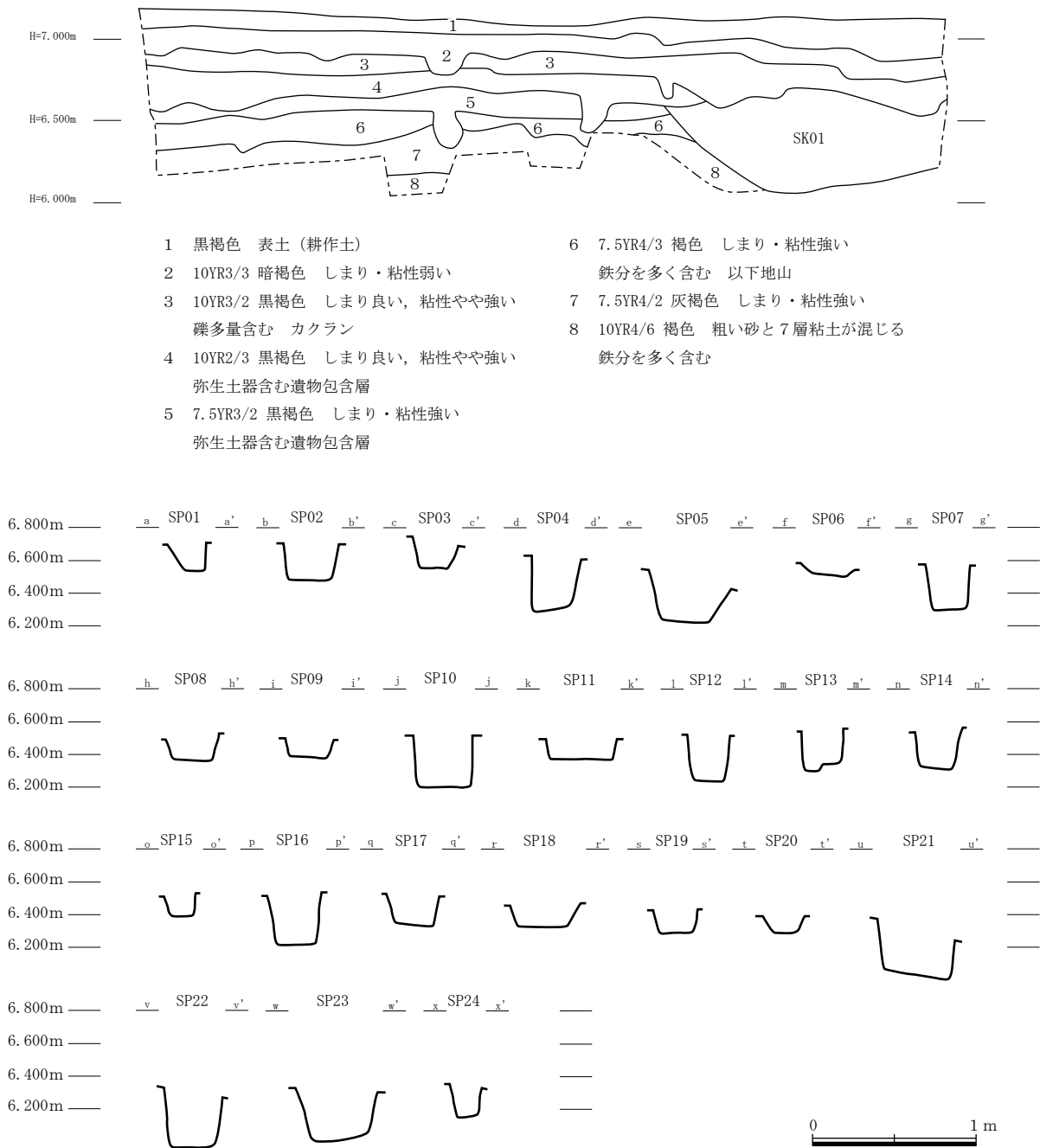
貝塚中心部から北西に150mあまりの地点に設定した。全7トレンチのうち、北西側に最も離れた場所に位置する。地表面に貝殻の散布はみられず、第7・8次調査で推定された貝層の二次堆積想定範囲よりも外側にあたる。

調査の結果、土層は8層に分けられた。うち1～3層は現代遺物を含む攪乱層、4・5層は主に弥生土器を含む遺物包含層、6～8層は当初遺物包含層の可能性を考慮して掘り下げたが、結果として遺物の出土は無く、しまりの強さなどから地山と判断した。現地表から地山である6層上面までの深さは約60cmである。

遺構は4～6層の各層上面で、土坑1基（SK01）と小穴24基（SP01～24）の計25基を検出した。4層上面で検出したのはSP01～07及びSK01で、黒褐色土を覆土とする。小片のため図化していないが、SP02・05では須恵器片が出土している。SK01からは多くの弥生土器が出土しており、性格は不明ながら弥生時代の遺構である可能性が高い。土坑として扱ったが、屈曲気味にトレンチをかすめる溝状遺構の可能性もある。5層上面で検出したのはSP08～18である。その他、SK01の覆土上で検出したSP19も同じ層位に帰属する可能



第30図 10次調査第4トレンチ遺構実測図 (S=1/40)



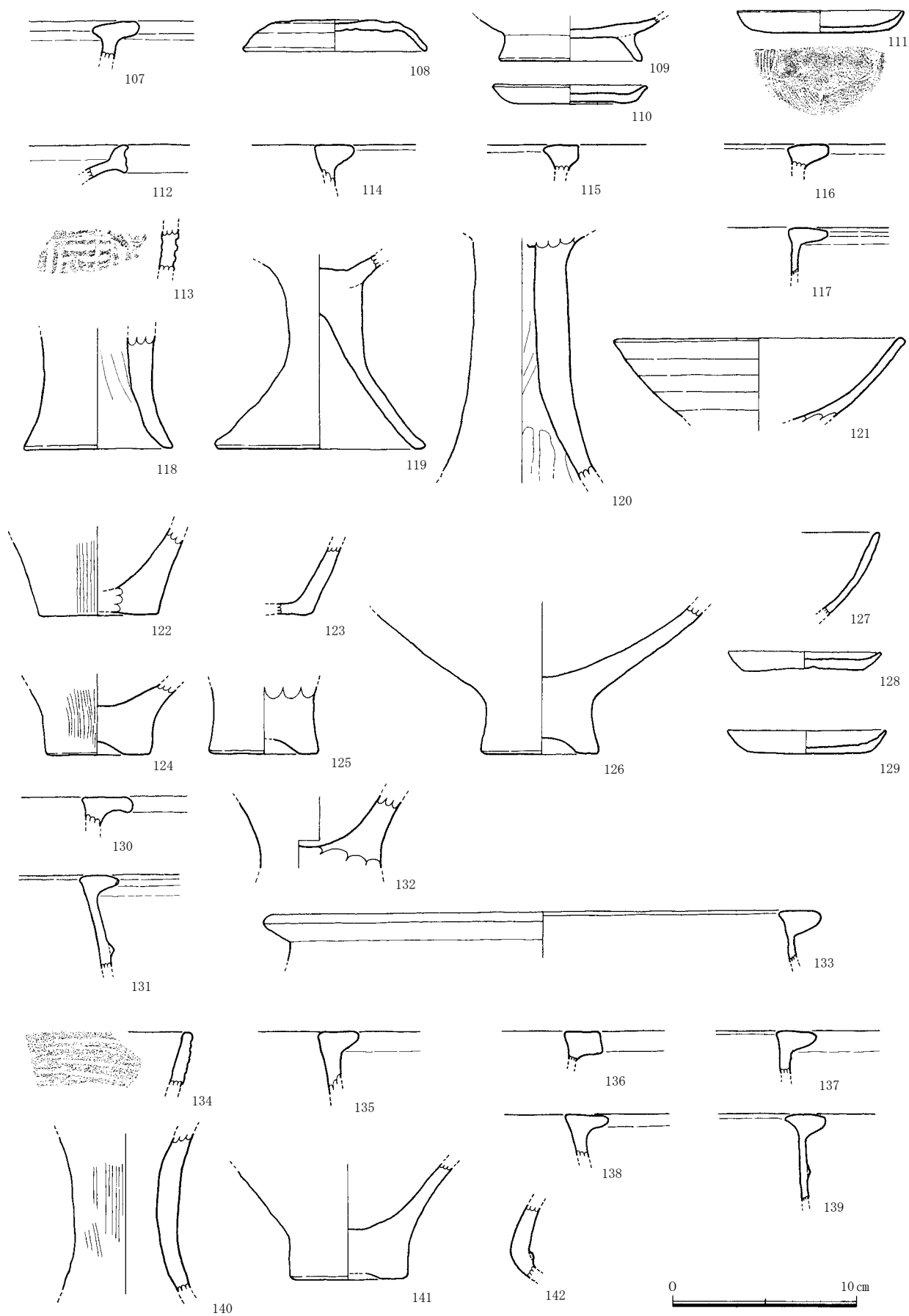
第31図 10次調査第4トレンチ北壁土層断面及び遺構断面図 (S=1/40)

性がある。6層上面で検出したのはSP21～24で、他にSP09の下で検出したSP20も同じ層位として図示した。小穴については、共伴する遺物がほとんど無いことから遺構の時期を特定し難いが、4層・5層の出土遺物からみて、少なくとも5・6層上面で検出した遺構については弥生時代以前に遡ると考えられる。ただし、小規模なトレンチ内での検出であるため、その位置関係から建物跡等の復元を行うのは困難である。

本トレンチ内ではごくわずか、縄文時代後～晩期に属するとみられる土器片が出土したが、明確に縄文時代に帰属する遺構や遺物包含層はみられない。この調査成果により、第4トレンチ周辺に縄文時代の集落跡は想定できない。

出土遺物 (第32・39図)

107～111は攪乱層である1～3層の出土遺物である。107は弥生土器の甕の口縁部で、口縁の形状からV



第32図 10次調査第4トレンチ出土土器 (1/3)

類に分類できる。108は須恵器の坏蓋で、内面を回転ナデ、外面を回転ヘラケズリとナデで調整している。上部につまみの痕跡はみられない。109は土師器の埴で、底部及び高台部分のみ残存する。内外面ともナデにより調整している。110・111は土師器の皿で、どちらもナデ調整の上、底部には回転糸切り痕が残る。

112～129は4層出土の遺物である。112は「く」の字形に屈曲して立ち上がる縄文土器の口縁部で、外面に横方向の平行する沈線を施すⅦ類の土器である。113は外面に縦・横方向の沈線を連続して施すもので、Ⅲf類に分類される。114～117は弥生土器の甕の口縁部で、口縁部の形状から114・116・117はⅡa類、115はⅡb類に分類される。118～120は同じく弥生土器の高坏の脚部である。内外面ともナデで仕上げ、外面の一部にわずかに縦方向の刷毛目が残る。120のみ、外面を赤色に塗っている。121も弥生土器の高坏とみられ、坏部分が残存する。内外面ともナデで仕上げ、底部には脚部と接合した痕が残る。122・123は平底の甕の底部である。122には縦方向の刷毛目が明瞭に残る。124～126は台付甕の脚部及び底部である。いずれも脚部は円柱状の粘土塊の一部を凹ませる事で脚部としており、124には外面に明瞭な縦方向の刷毛目が残る。127は土師器埴の口縁部である。外面はナデ調整で、内面は黒くいぶした上でよく磨かれた黒色土器（内黒土器）である。128・129は土師器の皿で、全体をナデにより調整し、底部には回転糸切り痕が残る。

130～133は5層出土の遺物である。いずれも弥生土器の甕片で、口縁の形状から130・131はⅡa類、133はⅡb類に分類できる。131は口縁部突帯の頂部に連続して刻目を施し、口縁下部には断面三角形の突帯が1条めぐる。132は底部から脚部にかけての破片である。内外面とも器表面の劣化が激しく、調整は不明瞭である。

134～142はSK01出土の遺物である。134は外面に細い横方向の沈線を複数施す口縁部片である。特に口縁部が肥厚することは無く直線的に立ち上がる。縄文土器とみられるが詳細は不明である。135～142はいずれも弥生土器で、135～139は甕の口縁部、140は高坏の脚部、141は甕の底部、142は壺の頸部である。口縁部の形状により、135～138はⅡa類、139はⅡb類に分類される。

184はSK01から出土した石鏃である。黒曜石製で、一部を欠損するがⅡb類に分類できる。186も同じくSK01出土の磨石である。扁平な砂岩製で、両面に磨り跡がある。191は5層出土の砂岩製品である。断面三角形のうち2面が磨滅により凹んでおり、道具等の研磨に使用した砥石とみられる。192はSK01から出土した安山岩製の打製石斧で、形状はⅡa類相当である。193は5層から出土した蛇紋岩製の磨製石斧で、刃部を欠損するがⅡa類に分類できる。198は4層から出土した滑石製品で、石鍋の底部とみられる。底部には穿孔があり、内部に棒状の鉄製品が差し込まれている。外面には黒く煤が付着している。

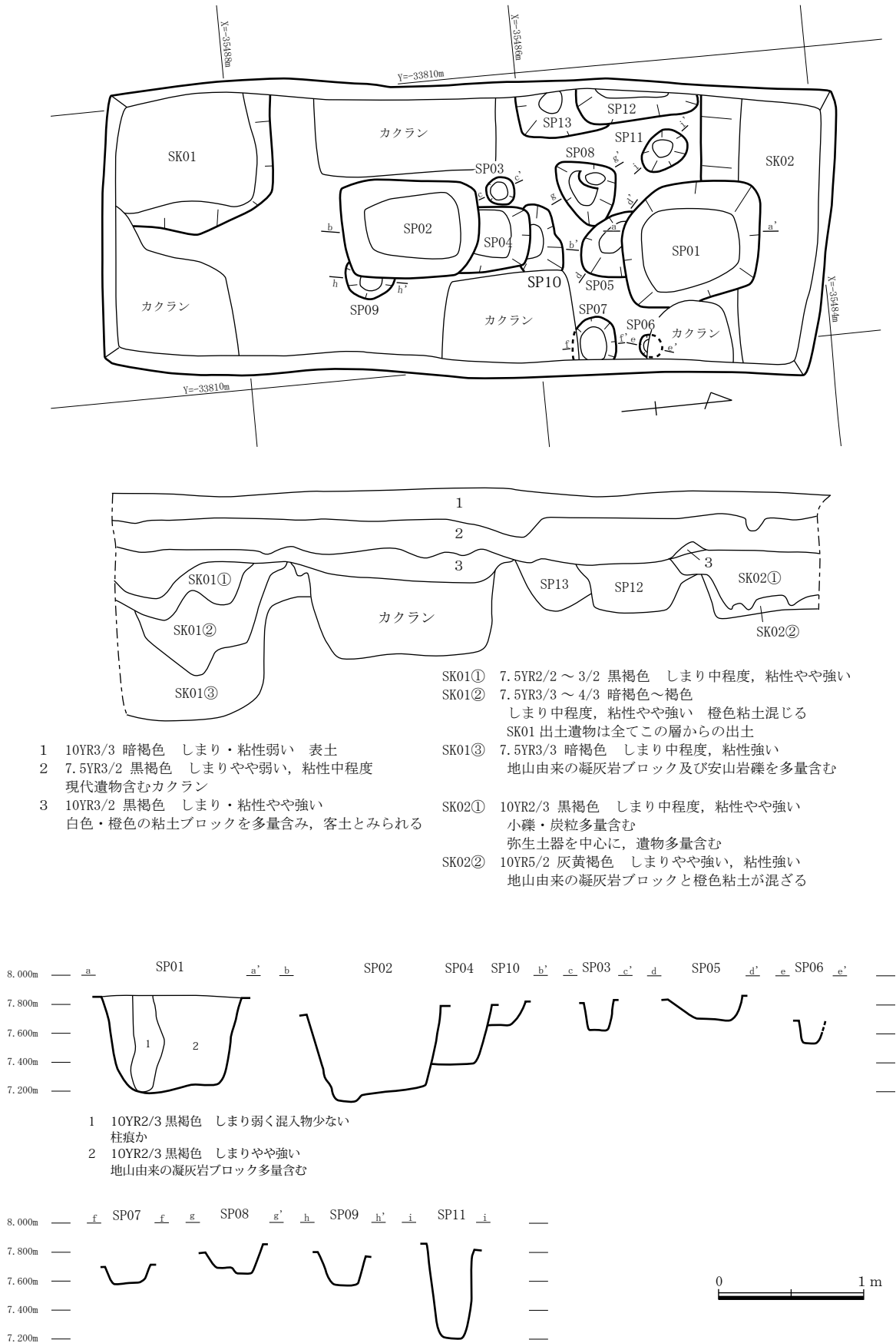
(5) 10次調査第5トレンチ (10次5T)

調査概要

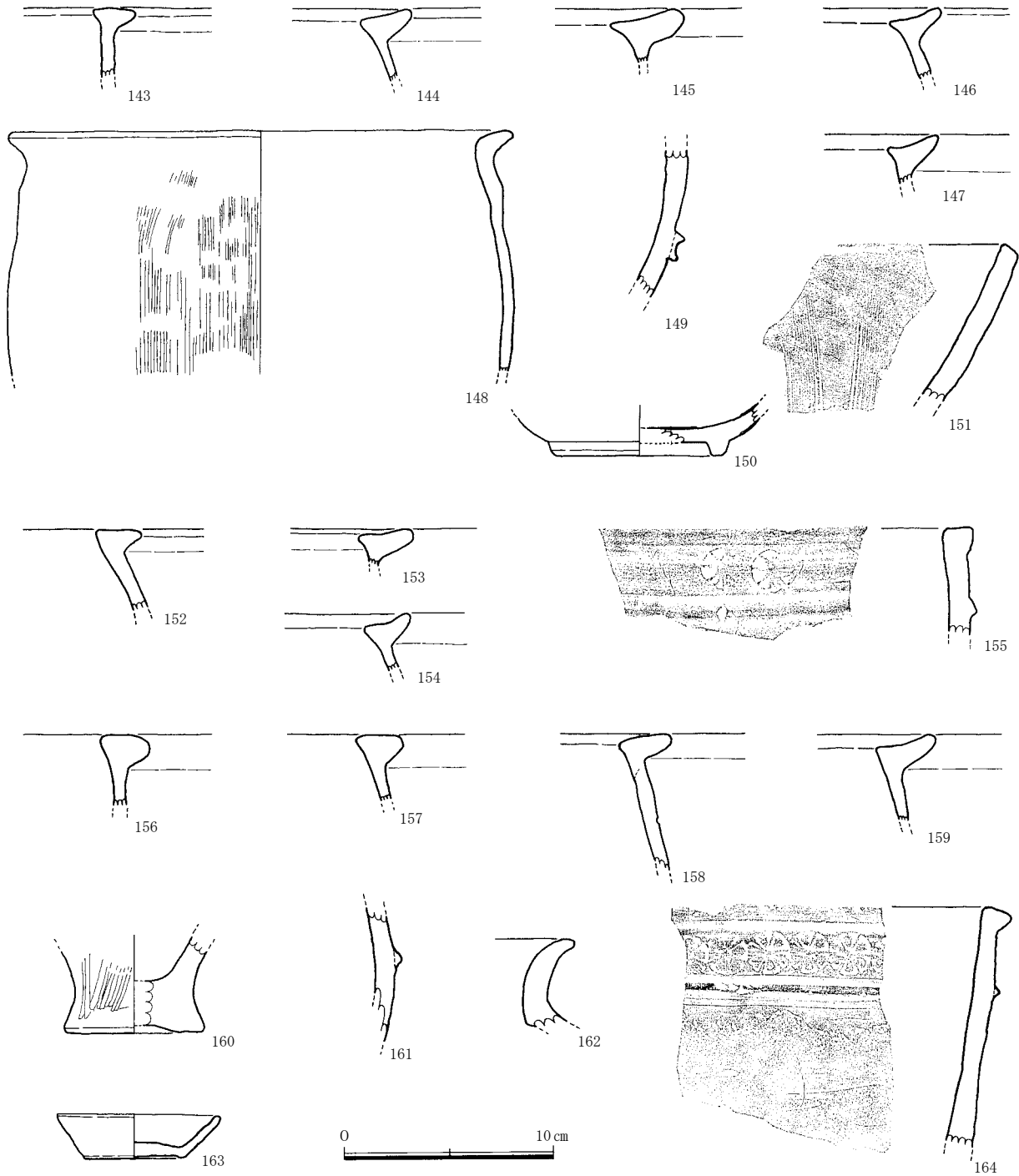
貝塚中心部から西へ120mあまりの地点に設定した。西側は急峻な崖を経て台地となっており、当該地点は貝塚部分から緩く傾斜しながら続く平坦地の西端にあたる。

調査の結果、現地表から約50cmの深さでもろい凝灰岩質の地山を検出した。土層は3層に分けられたが、全て現代の攪乱層である。遺構は地山を検出面として、土坑2基(SK01・02)と小穴13基(SP01～13)が検出された。このうち、SP01・SK01・SK02で多くの遺物が出土した。遺物の種類としては弥生土器が多く含まれるが、一方で土師器、瓦質土器、青磁碗などが共伴することから、これらの遺構は基本的に中世以降のものと考えられる。限られた面積の中で建物の復元は難しいが、SP02内に残る柱痕等から、これらが掘立柱建物の柱穴跡であることが推定できる。遺構の切り合い状況から、建て替えを伴って複数の建物が存在したと考えられる。

第2節 調査の結果



第33図 10次調査第5トレンチ遺構実測図・西壁土層断面図 (S = 1/20)



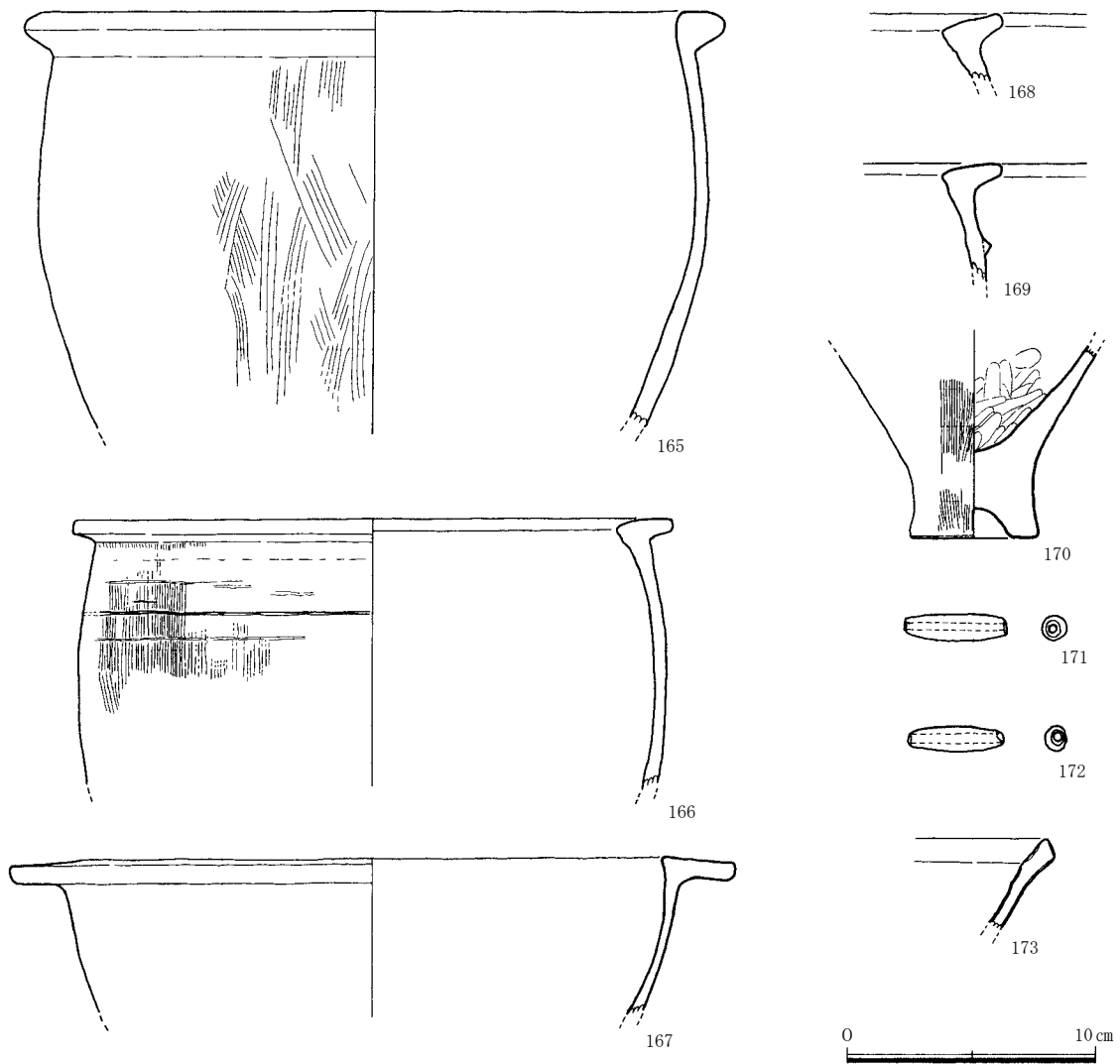
第34図 10次調査第5トレンチ出土土器・土製品1 (1/3)

本トレンチ内では縄文時代の遺構も遺物包含層も検出されず、轟貝塚につながる縄文時代の痕跡はほとんど無い。一方で、周辺住民からの聞き取りによると、東側隣接地では過去に貝殻の散布や遺物（石斧とみられる）が存在したとのことであり、近くまで縄文時代の遺跡がのびていた可能性は考えられる。

出土遺物 (第34・35図)

第5トレンチ内から縄文時代の遺物は出土せず、遺物の時期は大きく弥生時代と中世とに分けられる。

143～151は1～3層（攪乱層）出土の土器である。143～149は弥生土器の甕の口縁部であり、口縁の形状から143がⅡb類、148がⅢ類、144がⅤ類、145・147がⅥ類、146がⅦ類に分類される。149は胴部片で、粘土貼り付けによる横方向の隆帯上に凹線を施すことで上下2本の平行する突帯を造り出し、それぞれの頂



第35図 10次調査第5トレンチ出土土器・土製品2 (1/3)

部に連続して刺突を施す。150は青磁碗の底部である。高台は外側端部を斜めに面取りする。内面底部には帯状に無釉部分がある。151は瓦質土器の播鉢である。全体をナデにより調整し、内面に5本単位の播目がやや間隔を空けて施される。

152はSP13出土、153・154はSP01出土、167はSP08・SP10出土の弥生土器で、甕の口縁部である。口縁部の形状から152・167はⅡa類、153はⅥ類、154はⅦ類に分類される。155はSP01及び02出土の瓦質土器で、火鉢とみられる。口縁部がやや肥厚し、口縁下部には断面三角形の突帯がめぐる。口縁と突帯との間には、花卉状のスタンプが2つ並んで施文される。

156～164はSK01出土の遺物である。156～159や弥生土器の甕の口縁部で、156・157がⅡa類、158がⅣ類、159がⅦ類に分類される。160は甕の脚部で、円柱形の下部中央に凹みを持たせている。内面底部は二次焼成により黒色を呈す。161は甕の胴部で断面三角形の突帯がめぐる。162は壺(短頸壺)の口縁部である。銅上部からほぼ直角に上方に折れ、外反しながら口縁部に至る。口縁部内側に黒斑がみられる。163は土師器の坏である。内外面ともナデで調整され、底部には回転糸切り痕が残る。164は瓦質土器の火鉢で、口縁部が外側に大きく突出する。口縁と口縁下部にめぐる突帯との間には花卉状のスタンプを連続して施文する。

165・166・168～173はSK02出土の遺物である。ほとんどが弥生土器の甕で、口縁部の形状から165はⅡa類、166・168・169はⅢ類である。170は台付甕の底部・脚部である。脚部は下部がやや広がる円柱形の底部を大きく凹ませている。内面底部は二次焼成により黒色を呈す。171・172は土錘である。中央がやや膨らむ円柱形を呈す。貫通する孔の内面は直線的で、焼成後の穿孔ではなく、軸に粘土を巻いて焼き上げたものとみられる。173は青磁碗である。口縁部がやや肥厚し、内面の口縁下部には稜線を持つ。

188はSK01出土の磨石・敲石である。安山岩製で、敲打により凹む部分と磨滅により扁平となる部分が存在する。また、表面が赤色化し一部表面が剥離しているなど、被熱によるとみられる損傷がある。

(6) 11時調査第6トレンチ (11次6T)

調査概要

貝塚中心部から西、第5トレンチから南西方向に約80mの地点に設定した。トレンチの南西50mあまりの場所には、現在「日本名水百選」のひとつとして知られる湧水「轟水源」が存在する。貝塚が形成された縄文時代にも同じ場所に湧水があったとする根拠は無いが、これに類する湧水が近くにあった可能性は否定できない。湧水付近の水場遺構などの確認を主な目的としてここに調査区を設定した。

調査の結果、土層は5層に分けられたが、攪乱層中の現代遺物を除き遺物はほとんど出土しなかった。1～3層は現代遺物を含む攪乱層であり、4・5層からはそれぞれ須恵器の小片が1点ずつ出土したことから、古墳時代以降の遺物包含層と考えられる。

遺構は、トレンチを南西～北東方向に横切る溝状遺構が一基(SD01)と、直径30cm～1m程度の小穴が7基(SP01～07)、トレンチ東端で大半をSP04と重複しつつ、わずかに検出された土坑(SK01)の計9基が検出された。小穴は主に掘立柱建物の柱穴跡とみられるが、その形状・規模から小規模な不整形のもの(SP01・03・05)と規模が大きく隅丸方形を呈するもの(SP02・04・06・07)の2群に大別できる。出土遺物が無いため詳細な時期は不明だが、不整形のものの方が隅丸方形のものより後出するとみられる。

第6トレンチ内では縄文時代の遺構・遺物・遺物包含層は一切検出されず、周囲に遺物の散布もみられなかった。当該地点周辺に轟貝塚と関連する縄文時代の痕跡は存在しないとみられる。

(7) 11次調査第7トレンチ (11次7T)

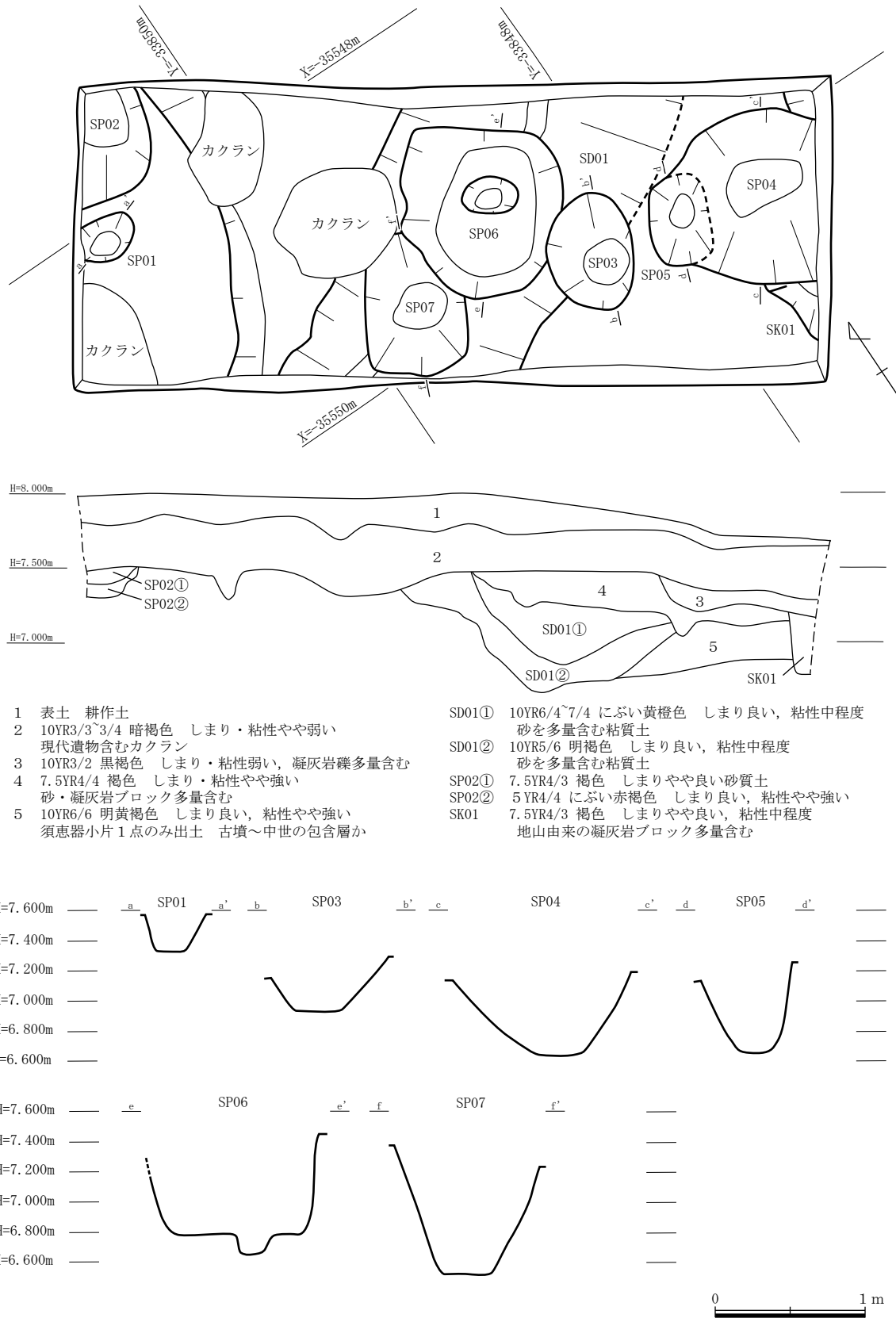
調査概要

貝塚中心部から南西方向に約160mの地点に設定した。前述の第6トレンチと同様に、轟水源周辺における遺構の確認を念頭に調査区を設定した。

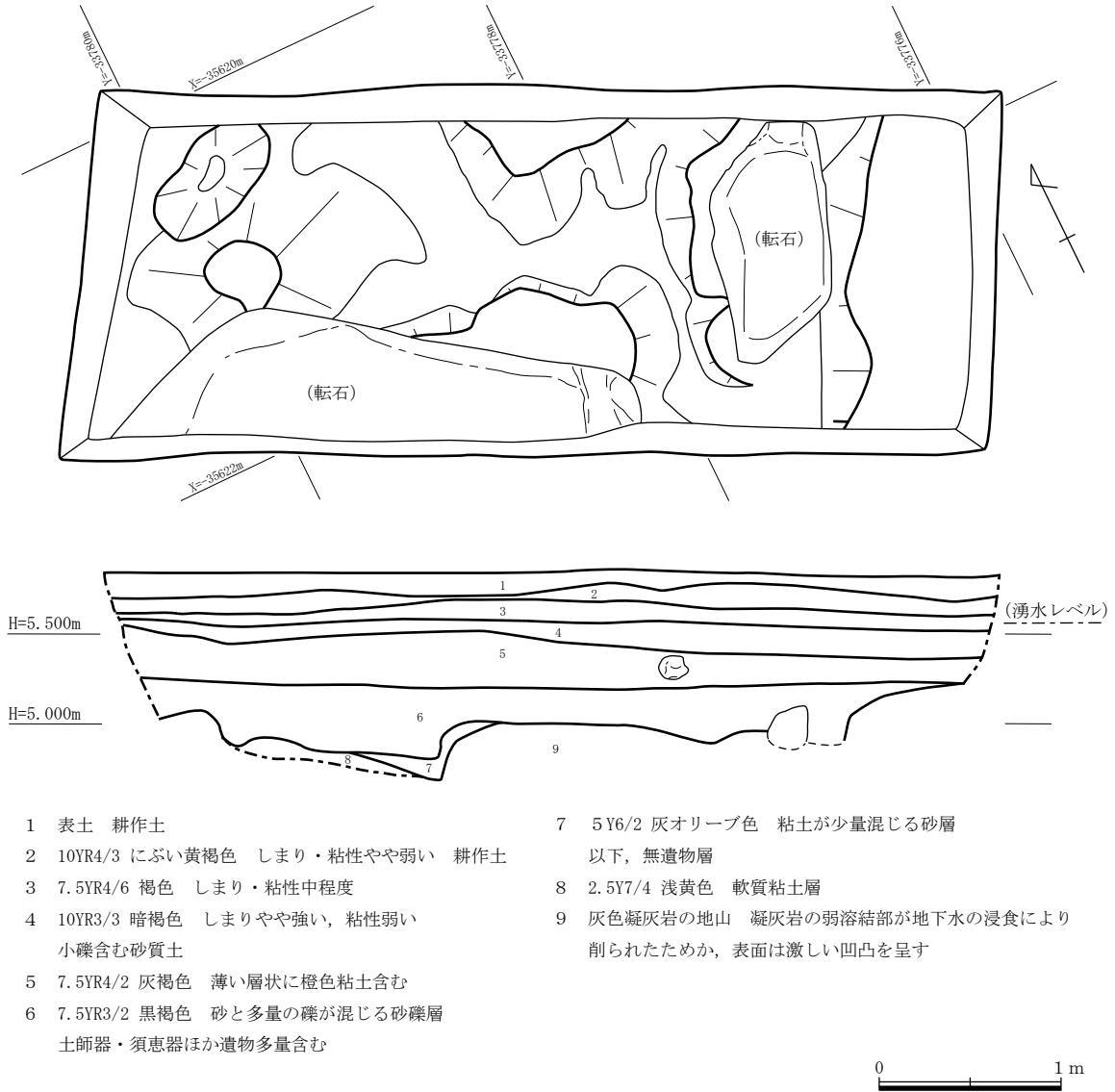
調査の結果、現地表から約80cmで凝灰岩の岩盤から成る地山を検出した。土層は6層に分層し、うち1～5層は現代の耕作土や盛土等から成る攪乱層、6層は弥生土器・土師器・須恵器などを多量含む遺物包含層である。その他、砂層である7層と軟質粘土層である8層を記録したが、これらは無遺物の自然堆積層とみられ、地山の一部と認識した。

トレンチ内では5層下部から激しい湧水がみられ、ポンプで排水しながらの調査となった。その結果、6層上面や地山上面での十分な遺構検出が行えず、以下に述べる出土遺物は全て遺物包含層の6層として一括して記録した。完掘後の地山表面は非常に凹凸に富んだ地形を呈しており、中には見落とされた遺構が存在する可能性がある。しかし、湧水の激しさと局所的に堆積する粘土・砂の存在からみて、これらの凹凸は激しい地下水流により凝灰岩質の地山が削られた結果である可能性が高く、必ずしも人為的な掘削によるものではないと考えられる。注目すべきは多くの砂礫から成る6層から出土した多量の遺物である。これらが遺構に伴うものでないとするならば、トレンチより標高が高い南西側の丘陵部から流れ込んだ可能性が高く、

第2節 調査の結果



第36図 11次調査第6トレンチ遺構実測図・北壁土層断面図 (S = 1/20)



- | | |
|---|--|
| 1 表土 耕作土 | 7 5Y6/2 灰オリーブ色 粘土が少量混じる砂層 |
| 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり・粘性やや弱い 耕作土 | 以下、無遺物層 |
| 3 7.5YR4/6 褐色 しまり・粘性中程度 | 8 2.5Y7/4 浅黄色 軟質粘土層 |
| 4 10YR3/3 暗褐色 しまりやや強い、粘性弱い
小礫含む砂質土 | 9 灰色凝灰岩の地山 凝灰岩の弱溶結部が地下水の浸食により
削られたためか、表面は激しい凹凸を呈す |
| 5 7.5YR4/2 灰褐色 薄い層状に橙色粘土含む | |
| 6 7.5YR3/2 黒褐色 砂と多量の礫が混じる砂礫層
土師器・須恵器ほか遺物多量含む | |

第37図 11次調査第7トレンチ平面図・北壁土層断面図 (S = 1/40)

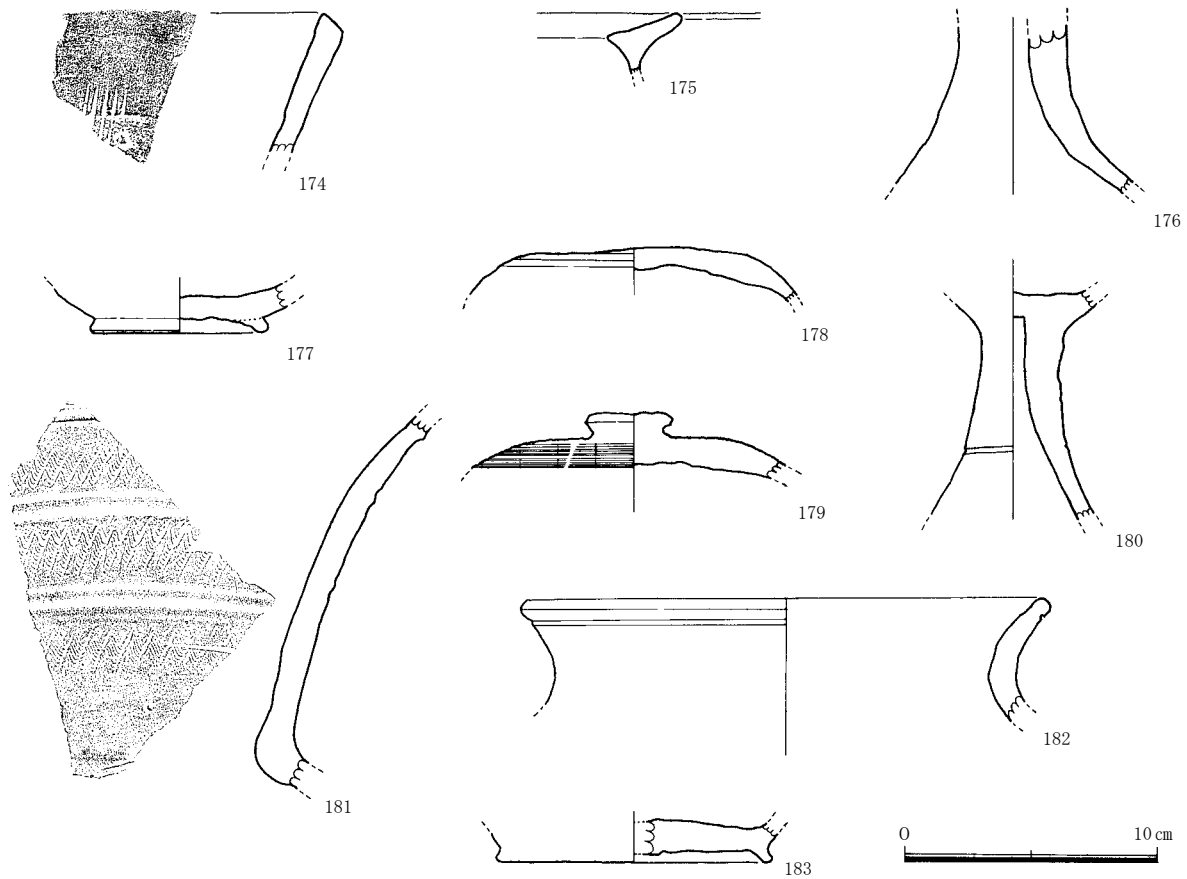
トレンチ西側に弥生時代から古墳時代にかけての未確認の遺跡が存在する可能性が示唆される。

第7トレンチでは縄文時代の遺構・遺物及び遺物包含層は検出されず、この付近が轟貝塚につながる縄文時代の遺跡の一部である可能性は低いとみられる。

出土遺物 (第38・39図)

174は5層出土の瓦質土器で、播鉢の口縁部である。内外面ともナデで調整され、内面に5本単位の播目が施される。

175～183は6層出土の遺物である。175は弥生土器の甕で、口縁部の形状からV類に分類される。176も弥生土器で、高坏の脚部である。内外面ともナデで調整される。177は土師器の埴である。外面に低い高台が付き、内面を黒く燻して研磨した黒色土器(内黒土器)である。178～183は須恵器である。179は坏蓋で、内面は回転ナデ、外面はカキ目で調整される。外面中央には円形のつまみが付く。178も坏蓋だが、一部を除き還元が不十分のためか赤く発色しているのが特徴的である。内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリで調整され、つまみは付かない。180は高坏である。脚部下半に1条の細い沈線がめぐる。181は甕の頸部片である。外面は2本単位の沈線で区画した間に波状文を施す。内面にはごくわずか、灰釉が付着する。182は壺の頸



第38図 11次調査第7トレンチ出土土器 (1/3)

部～口縁部で、大きく外反しつつ立ち上がる。内外面とも回転ナデで調整され、口縁部外面に1本の沈線が施される。183は坑の底部で、外面底部は回転ヘラケズリ、高台及び内面は回転ナデで調整される。

187は6層出土の磨石である。表面全体が平滑だが、一面が特に平らに磨滅している。190は砂岩製の板石で、一面が特に平滑に磨滅している点から、石皿の一部とみられる。196は、本来は円盤状を呈す滑石製品の一部とみられ、詳細は不明だが紡錘車の可能性が考えられる。

第3節 小結

第1～第7トレンチの調査の結果、第1トレンチで縄文時代後期の遺物を含む遺物包含層と、小穴を中心とした若干の遺構を検出した他、第3トレンチで混土貝層を一部検出した。しかし、明確な縄文時代の痕跡が見つかったのはこの2地点のみであり、他のトレンチでは縄文時代の遺構や遺物包含層は検出されなかった。第4トレンチや第7トレンチで、後世の遺物に混じって少量の土器や石器が出土した程度である。

轟貝塚の付近にある湧水「轟水源」の周辺における遺跡の広がりについても、第6・第7トレンチにより検討したが、少なくともこれらのトレンチで明確な縄文時代の痕跡は見つけられなかった。調査面積がごく限られているため、これを以て直ちに轟水源周辺に縄文時代の遺跡が存在しないと切り切ることにはできないが、少なくとも現状、轟貝塚に伴う居住域を水源の近くに求める積極的な根拠は示せない。轟貝塚周辺における縄文時代の湧水の存否やその位置、水場遺構等の有無については、引き続き今後の検討課題と言えよう。

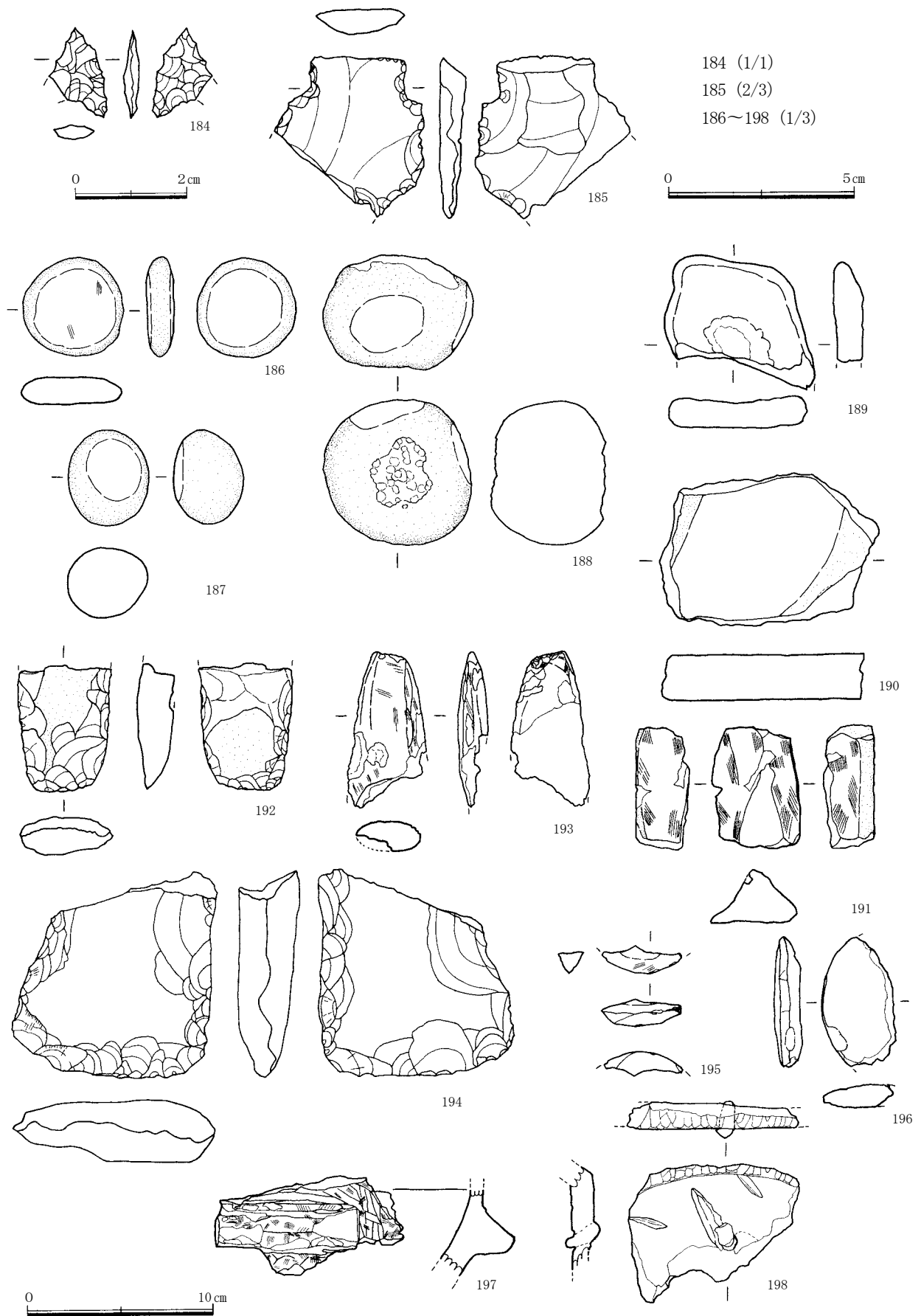
以上により、遺構や遺物包含層といった縄文時代の痕跡が認められる範囲は、平成16・17(2004・2005)年度の第7・8次調査で推定した「貝層堆積範囲」から大きく出ることではなく、調査前に想定していたような、貝塚北西側の微高地上に広く集落遺跡が展開するといった様子はいかたがえない。よって、貝塚に伴う居住域

は別の場所に求める必要がある。一方で、居住域が貝塚から離れた別の場所に存在する可能性も否定はできないが、貝塚中心部の調査でこれまでに出土し、現在も地表面に散布している多量の遺物からみて、この貝塚を形成した人たちの居住域がここから何kmも離れた場所に存在するとは、積極的には想定し難い。

では、貝塚に伴う居住域をどこに求めるか。昭和41(1966)年の慶應義塾大学を中心とした調査成果(轟貝塚第6次調査)からは、貝層の形成時期は阿高式土器を中心とした縄文時代中期と、鐘崎式土器等を中心とした後期とに大別でき、各時期の貝層は一部重なりつつも、少し範囲を変えて堆積している様子が示された。これに加え、今回の調査で貝塚に最も近い第1・第3トレンチでのみ縄文時代後期を主体とする遺構や遺物包含層が確認された点を踏まえれば、各時期の居住域は基本的に貝層が形成された場所に近接しており、時期を追って貝層の形成範囲と共に移動していった可能性が考えられる。そうであれば、これまでの調査で確認できていない縄文時代前期～中期の居住域は、後に堆積した中期～後期の貝層の下に埋もれている可能性が考えられる。

こうした考えに基づき、古くに調査された貝塚中心部における堆積状況や遺構の有無などを今一度整理することを目的に、貝塚中心部における発掘調査を実施するに至った。これについて、調査の詳細を第4章で述べる。

なお、縄文時代以外の調査成果として、第2・第4・第5トレンチを中心に多くの弥生土器や中世の遺物が出土している。縄文時代の貝塚以外に、弥生時代～中世を含む複合遺跡としての轟貝塚の一側面である。遺跡の西側には、かつて弥生時代中期の黒髪式甕棺が出土した北平遺跡が存在し、また東側には中世宇土の領主である宇土氏・名和氏の居城であった宇土城跡が存在する。本書では詳しく言及し得ないが、これらの遺跡と密接に関わるものとして重要な調査成果である。



第39図 9~11次調査出土石器・石製品 (1/1, 1/3, 2/3)

第2表 轟貝塚第9～11次調査 出土土器・土製品観察表1

挿図 番号	実測 番号	出土地点	層位	種別	器種	残存部位		器面調整		胎土	焼成	色調(内面/外面)	口径 (cm)	残存高 (cm)	分類	備考
						胴部	口縁部	内面	外面							
1	9-16	1 T	不明	縄文土器	浅鉢	～口縁部	ミガキ, 磨消細文	ミガキ, 沈線	角閃石・雲母多量含む	良	灰黄褐/灰黄褐	24.0 (復元)	8.1	VI	VI	穿孔あり
2	9-4	1 T	4層	縄文土器	鉢	口縁部	ナデ	ナデ, 刻目	角閃石・雲母やや多く含む	良	褐/にぶい橙	不明	4.1	Vb1		
3	9-8	1 T	4層	縄文土器	鉢	口縁部	ナデ	ナデ, 刻目	角閃石・長石少量含む	良	褐灰/にぶい赤褐	不明	4.4	IVc		
4	9-10	1 T	4層	縄文土器	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ, 沈線	角閃石・長石やや多く含む	良	褐灰/にぶい褐	不明	2.8	Vb1		
5	9-14	1 T	4層	縄文土器	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ, 押引文	角閃石・長石少量含む	良	褐灰/にぶい赤褐	不明	3.0	V?		穿孔あり
6	9-12	1 T	4層	縄文土器	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	角閃石・長石少量含む	良	灰黄褐/灰褐	不明	3.9			
7	9-13	1 T	4層	縄文土器	鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ, 沈線 口唇部: 刺突	角閃石・長石・砂粒多量含む	良	黒/黒	不明	3.1	VII		
8	9-9	1 T	4層	縄文土器	深鉢	口縁部	ミガキ	沈線, ミガキ 口唇部: 刺突	角閃石・砂粒少量含む	良	にぶい赤褐/にぶい赤褐	不明	4.1	VII		9と同一個体か
9	9-11	1 T	4層	縄文土器	深鉢	胴部	ミガキ	沈線, ミガキ	角閃石・砂粒少量含む	良	にぶい赤褐/にぶい赤褐	-	4.9	VII		8と同一個体か
10	9-15	1 T	4層	縄文土器	深鉢	胴部	ナデ	ケズリ	角閃石・長石少量含む	良	にぶい黄褐/褐	-	4.1	III		
11	9-6	1 T	4層	縄文土器	深鉢	胴部	ナデ	貝殻条痕	金雲母・角閃石多量含む	良	褐灰/にぶい橙	-	4.5	III		
12	9-7	1 T	4層	縄文土器	浅鉢	～胴部	ナデ	ケズリ	石英・金雲母・角閃石 多量含む	良	黒褐/にぶい黄橙	-	4.5	III		
13	9-5	1 T	4層	縄文土器	深鉢	底部	ナデ, 指おさえ	ナデ	角閃石少量含む	良	にぶい黄褐/にぶい黄褐	-	4.6	VI		
14	9-1	1 T	5層	縄文土器	深鉢	胴部	ナデ	磨消細文, 凹線	雲母・石英やや多く含む	良	浅黄褐/灰白	-	2.6	VI		
15	9-18	1 T	SK01貝層中 4層	縄文土器	甌	～口縁部	ナデ	磨消細文, ミガキ	砂粒多量含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	30.0 (復元)	8.9	VI		
16	9-19	1 T	SK01貝層中	縄文土器	鉢	口縁部	ナデ	ナデ, 細文	角閃石少量含む	良	褐灰/褐灰	不明	3.9	VI		
17	9-20	1 T	SK01貝層中	縄文土器	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ 口唇部: 刺突	雲母・砂粒少量含む	良	灰黄褐/灰褐	不明	3.8	VI		
18	9-24	1 T	SP02	縄文土器	深鉢	胴部	ナデ	ナデ, 刺突	角閃石・雲母やや多く含む	良	にぶい黄褐/黒	-	3.4	IVc		
19	9-23	1 T	SP02	縄文土器	深鉢	胴部	ナデ	ナデ, 沈線	雲母・砂粒少量含む	良	褐灰/にぶい褐	-	3.4	IVa		
20	9-22	1 T	SP02	縄文土器	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	金雲母・石英少量含む	良	灰褐/にぶい褐	-	7.5			
21	9-25	1 T	4層	縄文土器	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	角閃石・砂粒少量含む	良	褐灰/暗灰	-	7.8	VII		
22	9-26	1 T	SP10	縄文土器	台付甌	胴部	ナデ	刷毛目	金雲母・石英多量含む	良	橙/橙	-	3.8			
23	9-27	1 T	SP15	縄文土器	深鉢	口縁部	ナデ	磨消細文	角閃石・雲母微量含む	良	にぶい褐/にぶい赤褐	不明	3.5	VI		
24	9-63	2 T	4層	縄文土器	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ, 刺突	金雲母・石英多量含む	良	にぶい褐/にぶい赤褐	不明	3.9	IV?		
25	9-65	2 T	5層	縄文土器	鉢	口縁部	ナデ	ナデ	角閃石多量含む	良	灰黄褐/灰黄褐	不明	2.2	VII		
26	9-49	2 T	4層	弥生土器	壺	口縁部	ナデ	ナデ	角閃石・石英少量含む	良	浅黄橙/橙	不明	1.8			
27	9-36	2 T	4層	弥生土器	壺	口縁部	ナデ	ナデ	角閃石多量, 雲母・石英少量 含む	良	浅黄橙/黒	不明	2.4			
28	9-39	2 T	4層	土師器	壺	頸部	ナデ	ナデ	石英・砂粒少量含む	良	浅黄橙/にぶい橙	-	3.3	V		
29	9-67	2 T	5層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	角閃石少量含む	良	橙/橙	不明	1.4			
30	9-32	2 T	3層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	金雲母・角閃石・石英微量 含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	不明	2.6	IIa		
31	9-56	2 T	5層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	角閃石・砂粒多量含む	良	橙/にぶい橙	不明	2.3	IIa		
32	9-61	2 T	5層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	金雲母・石英多量含む	良	浅黄橙/灰褐	不明	3.0	I		
33	9-37	2 T	4層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	砂粒少量含む	良	にぶい橙/にぶい橙	不明	4.5	IIa		
34	9-68	2 T	5層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	石英・砂粒多量含む	良	橙/にぶい橙	不明	3.0	IV		
35	9-70	2 T	5層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	角閃石多量, 石英少量含む	良	浅黄橙/にぶい黄橙	不明	2.1	VI		
36	9-63	2 T	5層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	石英・角閃石多量含む	良	浅黄橙/浅黄橙	不明	2.6	IIb		
37	9-55	2 T	5層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	石英・砂粒多量, 雲母少量含む	良	にぶい橙/にぶい橙	不明	2.0	IIb		
38	9-66	2 T	5層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	角閃石・石英少量含む	良	にぶい黄橙/黒褐	不明	1.9	VI		
39	9-62	2 T	5層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	石英・雲母微量含む	良	浅黄橙/にぶい黄橙	不明	2.3	IIb		
40	9-31	2 T	3層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	石英多量含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	不明	1.8	V		
41	9-72	2 T	5層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	角閃石・石英多量含む	良	浅黄橙/浅黄橙	不明	2.3	V		
42	9-35	2 T	4層	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	角閃石・砂粒やや多く含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	不明	2.9	VI		
43	9-44	2 T	カクラン	弥生土器	甌	口縁部	ナデ	ナデ	角閃石・砂粒微量含む	良	浅黄橙/浅黄橙	不明	2.3	IV		

第3表 轟貝塚第9～11次調査 出土土器・土製品観察表2

挿図 番号	実測 番号	出土地点	層位	種別	器種	器面調整		胎土	焼成	色調(内面/外面)	口径 (cm)	残存高 (cm)	分類	備考
						内面	外面							
44	9-52	2 T	4層	土師器	坏	胴部 ～口縁部	ナデ	石英・角閃石少量含む	良	橙/橙	11.8 (復元)	4.1		
45	9-59	2 T	5層	弥生土器	甕?	底部	ナデ	角閃石・石英多量含む	良	灰白/浅黄橙	-	2.2		
46	9-60	2 T	5層	弥生土器	高坏	胴部	ナデ, 丹塗	角閃石・石英・砂粒多量含む	良	橙/赤褐	-	6.3		
47	9-57	2 T	5層	弥生土器	甕	胴部	ナデ	角閃石多量, 雲母少量含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	-	2.9		
48	9-28	2 T	1・2層	弥生土器	台付甕	脚部	刷毛目	角閃石・石英多量含む	良	黒褐/橙	-	5.3		
49	9-30	2 T	3層	弥生土器	高坏	坏底部	ナデ	雲母・砂粒少量含む	良	橙/橙	10.8 (復元)	2.3		黒色土器 (内黒)
50	9-45	2 T	カクラン	土師器	碗	底部 黒色磨研	ナデ ケズリ	石英・雲母・角閃石少量含む	良	暗灰/浅黄橙	-	1.7		
51	9-40	2 T	4層	須恵器	碗	底部 (高台)	ナデ	砂粒微量含む	良	褐灰～灰白/褐灰	-	1.3		
52	9-29	2 T	3層	土師器	皿	ナデ	ナデ 底部: 回転糸切	角閃石・石英微量含む	良	にぶい橙/にぶい橙	7.8 (復元)	1.2		
53	9-69	2 T	5層	土師器	皿	ナデ	ナデ 底部: 回転糸切	砂粒微量含む	良	浅黄橙/浅黄橙	不明	1.0		
54	9-38	2 T	4層	土師器	皿	ナデ	ナデ 底部: 回転糸切	雲母微量含む	良	褐灰/灰褐	-	1.5		
55	9-64	2 T	5層	土師器	皿	底部	ナデ	角閃石・雲母微量含む	良	灰白/浅黄橙	-	1.1		
56	9-51	2 T	4層	土師器	皿	ナデ	ナデ 底部: 回転ヘラ切	石英微量含む	良	浅黄橙/浅黄橙	不明	9.0		
57	9-33	2 T	3層	陶器	擂鉢	底部 糸織, 軸	軸	砂粒微量含む	良	黒褐/黒褐	-	4.2		
58	9-41	2 T	4層	白磁	碗	口縁部 軸	軸	陶石黒色粒少量含む	良	灰白/灰白	不明	1.9		
59	9-43	2 T	カクラン	白磁	碗	口縁部 軸	軸	陶石黒色粒少量含む	良	灰白/灰白	不明	2.5		
60	9-74	2 T	6層	弥生土器	鉢	胴部 ～口縁部	ナデ	石英・砂粒多量, 角閃石少量 含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	24.0 (復元)	6.9		
61	9-75	2 T	6層	弥生土器	鉢	胴部 ～口縁部	ナデ	角閃石・石英・砂粒多量含む	良	にぶい褐/にぶい褐	24.0 (復元)	8.0		
62	9-77	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	角閃石・石英・砂粒多量含む	良	浅黄橙/浅黄橙	23.4 (復元)	6.2		
63	9-82	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	雲母多量, 石英・角閃石 少量含む	良	褐灰/褐灰	不明	4.7		
64	9-86	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英・角閃石多量含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	不明	5.4		
65	9-78	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	角閃石・雲母・砂粒多量含む	良	灰褐/浅黄橙	不明	8.5		
66	9-79	2 T	6層	弥生土器	甕	胴部 ～口縁部	ナデ	角閃石・長石多量含む	良	にぶい黄橙/灰黄褐	18.0 (復元)	9.3		IIa
67	9-76	2 T	6層	弥生土器	甕	胴部 ～口縁部	ナデ, 刷毛目	角閃石・石英多量, 滑石 少量含む	良	にぶい橙/浅黄橙	21.0 (復元)	9.6		IIb
68	9-91	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	角閃石・雲母・石英 やや多く含む	良	灰白/浅黄橙	不明	2.1		IIa
69	9-83	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英多量含む	良	橙/にぶい橙	不明	6.1		IIa
70	9-94	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英・砂粒多量含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄褐	不明	4.0		IIa
71	9-88	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	雲母・角閃石・小礫多量含む	良	橙/にぶい橙	不明	2.9		IIa
72	9-90	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英・金・雲母多量含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	不明	3.5		IIa
73	9-80	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	雲母・角閃石多量含む	良	橙/にぶい黄橙	28.0 (復元)	5.7		IIa
74	9-85	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	角閃石・石英・雲母多量含む	良	橙/にぶい黄橙	不明	6.1		IIa
75	9-98	2 T	6層	弥生土器	甕	胴部 ～口縁部	ナデ	雲母・角閃石・石英 やや多く含む	良	灰褐/浅黄橙	不明	12.5		IIa 個別取上NO.1
76	9-92	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	角閃石・長石やや多く含む	良	浅黄橙/灰白	不明	4.2		IIb
77	9-87	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英・砂粒多量, 滑石少量 含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	不明	3.1		IIb

第4表 轟貝塚第9～11次調査 出土土器・土製品観察表3

挿図 番号	実測 番号	出土地点	層位	種別	器種	器面調整		胎土	焼成	色調(内面/外面)	口径 (cm)	残存高 (cm)	分類	備考
						内面	外面							
78	9-83	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	雲母・石英・角閃石 やや多く含む	良	橙/にぶい橙	不明	2.2	IIb	
79	9-87	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	角閃石・石英多量含む	良	にぶい橙/にぶい黄橙	不明	3.1	IIb	個別取上NO.4 口縁下部に穿孔あり
80	9-89	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英多量含む	良	にぶい橙/にぶい橙	不明	3.2	IIa	
81	9-85	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英・金雲母多量含む	良	にぶい橙/にぶい橙	不明	2.5	IIa	
82	9-89	2 T	6層	弥生土器	甕	口縁部 ～口縁部	ナデ 隆帯上に刻目	石英・角閃石やや多く含む	良	浅黄橙/浅黄橙	不明	8.4	IIa	個別取上NO.2
83	9-86	2 T	6層	弥生土器	甕	底部	ナデ	長石・角閃石やや多く含む	良	にぶい黄褐/にぶい黄橙	-	3.2		
84	9-103	2 T	6層	弥生土器	甕	脚部	ナデ	角閃石・長石多量含む	良	にぶい橙	-	3.4		個別取上NO.7
85	9-84	2 T	6層	弥生土器	甕	脚部	ナデ	石英・角閃石多量含む	良	浅黄橙/浅黄橙	-	4.5		
86	9-48	2 T	SK01	土師器	高坏?	口縁部	ナデ	石英・砂粒少量含む	良	橙/黄橙	不明	4.6		
87	9-47	2 T	SK02	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	角閃石・雲母少量含む	良	浅黄橙/灰黄褐	不明	2.3	VI	
88	9-46	2 T	SK02	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	砂粒多量含む	良	浅黄橙/にぶい橙	不明	2.6	I	
89	9-106	2 T	SP01	土師器	坏	口縁部	ナデ	長石微量含む	良	黒/にぶい橙	不明	2.9		黒色土器 (内黒)
90	9-107	2 T	SP06	土師器	坏	口縁部	ナデ	角閃石・石英・金雲母 やや多く含む	良	にぶい橙/にぶい橙	不明	3.0		
91	9-104	2 T	SP07	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	雲母・石英多量含む	良	浅黄橙/浅黄橙	-	6.3		
92	9-105	2 T	SP07	須恵器	甕	胴部	ナデ タタキ	雲母・石英多量含む	良	浅黄橙/浅黄橙	-	6.4		
93	9-42	2 T	4層	瓦質土器	鉢	底部	ナデ	角閃石・石英少量含む	良	灰/暗灰	不明	8.8		
94	9-101	2 T	SP13	弥生土器	壺?	口縁部	ナデ	角閃石・長石多量含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	不明	3.4		
95	9-54	2 T	SP13	土師器	皿	口縁部	ナデ	角閃石・長石多量含む	良	浅黄橙/浅黄橙	8.0	1.2		
96	9-102	2 T	SP15	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英・砂粒少量含む	良	浅黄橙/浅黄橙		4.3	IIa	
97	10-118	3 T	3層	縄文土器	深鉢	口縁部	ナデ	石英・金雲母多量含む	良	橙/にぶい橙	不明	2.2	VII	
98	10-113	3 T	1層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	角閃石・雲母多量含む	良	灰黄褐/灰黄褐	不明	4.5	IIa	
99	10-111	3 T	2層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	金雲母微量含む	良	灰白/浅黄橙	不明	1.9	IV	
100	10-109	3 T	1層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	角閃石・雲母多量含む	良	灰白/にぶい橙	不明	2.5	VII	
101	10-110	3 T	1層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	角閃石・雲母・石英少量含む	良	にぶい橙/にぶい橙	-	4.0		
102	10-114	3 T	3層	弥生土器	甕	脚部	ナデ	雲母・砂粒やや多く含む	良	灰白/橙	-	4.7		
103	10-116	3 T	3層	土師器	坏	底部	ナデ	砂粒微量含む	良	橙/橙	9.1 (復元)	2.9		
104	10-117	3 T	3層	瓦質土器	鉢	口縁部	ナデ	雲母・角閃石少量含む	良	黒/褐灰	不明	4.7		
105	10-115	3 T	3層	瓦質土器	槽鉢	口縁部	ナデ	角閃石・石英微量含む	良	灰/灰	不明	6.3		
106	10-108	3 T	1層	白磁	碗	底部	ナデ	陶石	良	灰白/淡黄	-	3.6		
107	10-125	4 T	3層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	雲母・石英少量, 砂粒多量 含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	不明	2.0	V	
108	10-120	4 T	1層	須恵器	坏蓋	口縁部	ナデ	砂粒微量含む	不良	灰白/褐灰	9.6	1.7		
109	10-121	4 T	3層	土師器	碗	底部	ナデ	角閃石・雲母少量含む	やや 不良	灰黄褐/にぶい黄橙	-	2.4		
110	10-122	4 T	3層	土師器	皿	口縁部	ナデ	角閃石・石英微量含む	やや 不良	浅黄橙/浅黄橙	8.0	1.0		
111	10-119	4 T	カクラン	土師器	皿	口縁部	ナデ	砂粒微量含む	良	にぶい褐/灰褐	8.8	1.2		
112	10-127	4 T	4層	縄文土器	浅鉢	口縁部	ナデ	角閃石・雲母少量, 砂粒多量含む	良	灰褐/にぶい褐	不明	1.9	VII	
113	10-124	4 T	4層	縄文土器	深鉢	胴部	ナデ	角閃石・砂粒多量含む	良	にぶい褐/にぶい褐	-	2.2	III f	
114	10-146	4 T	4層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英多量含む	良	にぶい褐/にぶい黄橙	不明	2.3	IIa	
115	10-148	4 T	4層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英・角閃石・雲母 やや多く含む	良	浅黄橙/浅黄橙	不明	1.4	IIb	

第5表 轟貝塚第9～11次調査 出土土器・土製品観察表4

挿図 番号	実測 番号	出土地点	層位	種別	器種	残存部位		器面調整		胎土	焼成	色調(内面/外面)	口径 (cm)	残存高 (cm)	分類	備考
						口縁部	ナデ	内面	外面							
116	10-147	4 T	4層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ			角閃石・雲母多量含む 石英・砂粒少量	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	不明	1.4	IIa	
117	10-139	4 T	4層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ			角閃石・石英・砂粒 含む	良	にぶい橙/橙	不明	2.6	IIa	
118	10-138	4 T	4層	弥生土器	高坏	脚部	ナデ			角閃石・石英・砂粒 多量含む	良	にぶい橙/にぶい橙	-	6.1		
119	10-123	4 T	4層	弥生土器	高坏	脚部	ナデ			角閃石・石英・砂粒多量含む	不良	赤褐/橙	-	10.5		
120	10-135	4 T	4層	弥生土器	高坏	脚部	ケズリ	丹塗り		雲母・長石やや多く含む	良	にぶい黄褐/赤褐	-	13.1		個別取上NO.2
121	10-126	4 T	4層	弥生土器	高坏	口縁部	ナデ			角閃石・石英微量含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	15.2 (復元)	4.3		
122	10-142	4 T	4層	弥生土器	甕	底部	ナデ	刷毛目		石英多量含む	良	灰褐/にぶい赤褐	-	4.7		
123	10-144	4 T	4層	弥生土器	甕	底部	ナデ	ナデ		角閃石・石英・金雲母多量 含む	良	橙/橙	-	3.6		
124	10-145	4 T	4層	弥生土器	甕	底部	ナデ	刷毛目		石英多量含む	良	にぶい褐/にぶい橙	-	4.1		個別取上NO.3
125	10-140	4 T	4層	弥生土器	甕	脚部	ナデ	ナデ		角閃石・雲母多量含む	良	橙	-	3.6		
126	10-128	4 T	4層	弥生土器	甕	底部	ナデ	ナデ		角閃石・雲母・石英・砂粒 多量含む	良	にぶい橙/にぶい橙	-	8.0		
127	10-143	4 T	4層	土師器	坑	口縁部	ナデ	ナデ		雲母・砂粒微量含む	良	黒/浅黄橙	不明	4.4		
128	10-136	4 T	4層	土師器	皿	ナデ	ナデ	底筋：回転糸切		金雲母多量含む	良	橙/橙	8.0	1.1		
129	10-137	4 T	4層	土師器	皿	ナデ	ナデ	底筋：回転糸切		雲母微量含む	良	橙/橙	8.3	1.3		
130	10-130	4 T	5層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		金雲母・石英多量含む	良	にぶい黄橙/にぶい褐	不明	1.6	IIa	
131	10-129	4 T	5層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		角閃石・石英・砂粒 多量含む	良	灰黄橙/にぶい黄橙	不明	5.1	IIa	
132	10-132	4 T	5層	弥生土器	甕	底部	ナデ	ナデ		石英・砂粒多量含む	良	褐灰/橙	-	3.9		
133	10-131	4 T	5層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		角閃石・雲母多量含む	良	橙/にぶい橙	24.4 (復元)	2.8	IIb	
134	10-159	4 T	SK01	縄文土器	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	沈線	角閃石・石英多量含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄褐	不明	2.9		
135	10-153	4 T	SK01	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		石英・金雲母多量含む	良	にぶい黄橙/にぶい橙	不明	3.4	IIa	
136	10-154	4 T	SK01	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		石英・金雲母多量含む	良	橙/橙	不明	1.7	IIa	
137	10-152	4 T	SK01	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		角閃石・石英・砂粒多量含む	良	灰黄褐/褐灰	不明	2.3	IIa	
138	10-157	4 T	SK01	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		角閃石・雲母多量含む	良	橙/にぶい橙	不明	2.4	IIa	
139	10-149	4 T	SK01	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		角閃石・雲母・石英少量, 砂粒多量含む	良	橙/橙	不明	4.8	IIb	
140	10-150	4 T	SK01	弥生土器	高坏	脚部	ナデ, ケズリ	ナデ		石英・雲母・砂粒多量含む	やや 不良	浅黄橙/橙	-	8.5		個別取上 NO.6
141	10-156	4 T	SK01	弥生土器	甕	底部	ナデ	ナデ		石英・砂粒多量含む	良	黒褐/橙	-	6.2		
142	10-151	4 T	SK01	弥生土器	蓋	頸部	ナデ	ナデ		石英・砂粒多量含む	やや 不良	橙/橙	-	4.0		
143	10-188	5 T	2層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		石英・金雲母多量含む	良	淡橙/浅黄橙	不明	3.3	IIb	
144	10-194	5 T	カクラン	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		角閃石・雲母多量含む	良	灰白/灰白	不明	3.6	V	
145	10-189	5 T	2層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		角閃石・石英微量含む	良	灰褐/にぶい黄橙	不明	2.6	VI	
146	10-190	5 T	2層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		角閃石・雲母やや多く含む	良	灰白/にぶい黄橙	不明	3.3	VII	
147	10-191	5 T	2層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		角閃石・雲母やや多く含む	良	浅黄橙/浅黄橙	不明	2.4	VI	
148	10-187	5 T	2層	弥生土器	甕	胴部 ～口縁部	ナデ	ナデ		金雲母・石英・砂粒多量含む	良	にぶい橙/にぶい橙	23.5 (復元)	11.4	III	
149	10-192	5 T	2層	弥生土器	甕	胴部	ナデ	ナデ	刷毛目	角閃石・雲母多量含む	良	にぶい黄橙/にぶい橙	-	7.0		
150	10-193	5 T	2層	青磁	碗	底部	ケズリ, 軸	ケズリ, 軸		陶石	良	灰白/灰白	不明	2.4		
151	10-163	5 T	3層	瓦質土器	插鉢	胴部	ナデ	ナデ		角閃石微量含む	良	灰褐/褐灰	不明	7.5		
152	10-164	5 T	SP13	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		角閃石・雲母やや多く含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄褐	不明	3.8	IIa	
153	10-166	5 T	SP01	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		角閃石・雲母やや多く含む	良	灰黄褐/灰黄褐	不明	1.6	VI	
154	10-165	5 T	SP01	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	ナデ		角閃石・雲母・石英少量含む	良	灰白/にぶい黄橙	不明	2.7	VII	

第6表 轟貝塚第9～11次調査 出土土器・土製品観察表5

挿図 番号	実測 番号	出土地点	層位	種別	器種	器面調整		胎土	焼成	色調(内面/外面)	口径 (cm)	残存高 (cm)	分類	備考
						内面	外面							
155	10-167	5 T	SP01.2層 SP02	瓦質土器	鉢	口縁部	ナデ	雲母微量含む	良	灰白/灰白	不明	5.1	IIa	個別取上NO.3
156	10-175	5 T	SK01	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英多量含む	良	橙/明黄褐	不明	3.3	IIa	
157	10-172	5 T	SK01	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	雲母・角閃石多量、石英少量含む	良	浅黄橙/黒褐	不明	3.2	IIa	
158	10-171	5 T	SK01	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	角閃石・雲母多量含む	良	浅黄橙/浅黄橙	不明	6.5	IV	
159	10-170	5 T	SK01	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	雲母・石英・砂粒多量含む	良	橙/橙	不明	4.1	VII	
160	10-173	5 T	SK01	弥生土器	甕	脚部	ナデ	角閃石・雲母・石英多量含む	良	褐灰/橙	-	4.6		
161	10-169	5 T	SK01	弥生土器	甕	脚部	ナデ、丹塗り	石英・雲母多量含む	良	にぶい橙/明赤褐	-	6.4		
162	10-176	5 T	SK01	弥生土器	壺	口縁部	ナデ	角閃石・雲母多量含む	良	浅黄橙/にぶい黄橙	不明	4.2		個別取上NO.4
163	10-177	5 T	SK01	土師器	坏	ナデ	ナデ 底部：回転糸切	角閃石・石英微量含む	良	橙/橙	7.4	2.2		
164	10-174	5 T	SK01	瓦質土器	鉢	脚部	ナデ	石英微量含む	良	灰黄/黄灰	不明	11.5		個別取上NO.2
165	10-178	5 T	SK02	弥生土器	甕	脚部 ～口縁部	ナデ、刷毛目	石英・滑石少量含む	良	にぶい橙/にぶい橙	25.5 (復元)	16.6	IIa	個別取上 NO.2・12
166	10-179	5 T	SK02	弥生土器	甕	脚部 ～口縁部	ナデ、刷毛目	石英多量、金雲母少量含む	良	にぶい橙/にぶい橙	19.4 (復元)	10.6	III	個別取上NO.1
167	10-186	5 T	SP08 SP10	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英・砂粒多量含む	良	橙/橙	23.1 (復元)	6.3	IIa	
168	10-182	5 T	SK02	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英・金雲母多量含む	良	橙/橙	不明	2.7	III	個別取上NO.7
169	10-181	5 T	SK02	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	石英・金雲母多量含む	良	橙/橙	不明	4.7	III	個別取上NO.1
170	10-180	5 T	SK02	弥生土器	甕	底部	刷毛目	角閃石・雲母・砂粒少量含む	良	黒褐/橙	-	7.7		個別取上NO.4
173	10-183	5 T	SK02	青磁	碗	口縁部	軸	陶石	良	灰オリーブ/灰オリーブ	不明	3.6	VI	個別取上NO.6
174	11-196	7 T	5層	瓦質土器	播鉢	口縁部	ナデ、条線	雲母・砂粒少量含む	良	褐灰/褐灰	不明	5.5		
175	11-199	7 T	6層	弥生土器	甕	口縁部	ナデ	角閃石・雲母・砂粒多量含む	良	浅黄橙/灰白	不明	2.4	V	
176	11-198	7 T	6層	弥生土器	高坏	脚部	ナデ	角閃石・石英多量含む	良	浅黄橙/浅黄橙	-	6.7		
177	11-197	7 T	6層	土師器	坑	底部	ミガキ	角閃石少量含む	良	黒/赤橙	-	1.9		
178	11-206	7 T	6層	須恵器	坏蓋	坏蓋	回転ナデ	小礫微量含む	良	にぶい褐/にぶい橙	-	2.2		
179	11-203	7 T	6層	須恵器	坏蓋	坏蓋	回転ナデ カキ目	石英・砂粒少量含む	良	灰白/灰白	-	2.8		
180	11-202	7 T	6層	須恵器	高坏	脚部	回転ナデ	砂粒微量含む	良	灰/灰	-	9.1		
181	11-204	7 T	6層	須恵器	甕	頭部	沈線、波状文	石英・砂粒少量含む	良	灰白/灰	-	14.8		
182	11-205	7 T	6層	須恵器	壺	口縁部	回転ナデ、沈線 ナデ 底部：回転ヘラケズリ	角閃石・砂粒微量含む	良	灰/灰	20.2 (復元)	4.9		赤色
183	11-207	7 T	6層	須恵器	坑	底部	回転ナデ	角閃石・雲母・砂粒微量含む	良	灰白/褐灰	-	1.6		

第7表 第9～11次調査出土遺物（石器・石製品・土製品）観察表

挿図 番号	実測 番号	出土地点	層位	種別	器種	分類	材質・石材	計測値				備考
								長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
171	10-184	5 T	SK02	土製品	土錘			4.2	1.1	-	4.5	
172	10-185	5 T	2層	土製品	土錘			3.9	1.1	-	3.3	
184	10-158	4 T	SK01	石器	石鏃	II b	黒曜石	1.6	1.1	0.3	0.2	
185	9-58	2 T	5層	石器	石匙	II a	安山岩 (サヌカイト)	4.4	4.2	7.0	14.0	
186	10-161	4 T	SK01	石器	磨石	I a	砂岩	5.4	5.4	1.5	64	
187	11-200	7 T	6層	石器	磨石	II a	安山岩	5.2	4.4	3.8	110	
188	10-168	5 T	SK01	石器	磨石・敲石	II a	安山岩	8.0	7.9	6.0	552	被熱により表面一部剥離
189	9-112	2 T	5層	石器	石皿		砂岩	7.3	8.1	1.6	126	中央に敲打による凹み
190	11-201	7 T	6層	石器	石皿		砂岩	8.2	11.7	2.4	410	被熱により一部変色
191	10-134	4 T	5層	石器	砥石		砂岩	6.6	4.7	2.9	106	
192	10-160	4 T	SK01	石器	打製石斧		安山岩	6.8	5.1	2.1	90	
193	10-133	4 T	5層	石器	磨製石斧	II a	蛇紋岩	8.4	4.3	1.6	60	
194	9-21	1 T	SK03	石器	打製石斧		安山岩	11.1	10.5	3.4	520	1 T個別取上 No. 1
195	9-71	2 T	5層	石製品	不明石製品		砂岩	4.3	1.5	1.5	6.0	
196	11-195	7 T	カクラン	石製品	円盤形 不明石製品		滑石	7.1	4.0	1.5	55	復元径は10cm程度 紡錘車の破片か
197	9-100	2 T	SK01	石製品	石鍋		滑石	4.9	9.9	2.4	170	
198	10-141	4 T	4層	石製品	石鍋		滑石	9.2	7.3	2.0	125	石鍋底部？穿孔があり、棒状の鉄製品が詰まっている